ることを得ず余乃此湯及び芎黄散を作り與ふるに目遂に明に復し一月餘にして諸症全く愈

二、一男子吐血すること數日止ず日に益劇し余其腹を診するに胸肋妨脹して痛む乃此方を作てあたふること二三劑にして効を奏す。

三、一男子年三十傷寒を患ふ四肢逆冷攣急して惡寒す其脈沈にして微に已に斃んとす諸醫蔓附の劑を投ずるに効あることなし余これを診するに胸脇苦滿す乃此方を與ふること二劑にして應じ其脈復す續け服せしむること二十餘劑にして全く愈

四、一男子年五十餘一病を得たり常に欝々として樂まず獨り戸を閉牖を塞て處り惕然として鷄犬の聲をおそれ上衝して目昏み寢臥安からず睡れば夢を見或遺瀝漏精して飲食味ひなく百治應せず綿延すること三年ばかり余診視するに胸脇苦滿す乃柴胡加桂湯及三黄丸(瀉心湯の丸なり)をのましめ時々柴圓を以てこれを攻む三月にして病全く愈ゆ。

「註」著者曰く柴胡加桂湯は小柴胡湯に桂枝を添加したるの方なりと雖も之れは全く小柴胡湯桂枝茯苓丸合方の證を誤認せしものにして特に此方の必要なきものなり又六角氏は柴圓を濫用するの癖ある人なるを以て其所說に眩惑すべからず。

五、一女子年十八年咳嗽痰を吐し氣上衝して頭目昏眩四肢倦怠心志たのしまず寒熱往來飲食味ひなく日に羸瘦し愈ざること一年所衆醫皆勞瘵とす余これを診するに脇肋妨脹す乃小柴胡加桂湯及び滾痰丸を

橘皮竹茹湯の治驗

柴胡桂枝乾姜湯の治驗

あたへて服せしむること三月許にして全効を收む。

六、一男子年四十餘歳初手背に毒腫を發し愈て後に一日忽然として惡寒煩熱し一身面目浮腫し小便通せず余診するに心下痞鞕し胸肋妨脹す乃此方及び平水丸を雜進て小便快利して全く愈。

橘皮竹茹湯の治驗

○古方便覽に曰く

一賈人七十余歳吃逆を患ること三十日口に勺飲も通ぜず諸醫治するなし愈ざること十七八日東洞先生往て診するに咽喉の肉脱して吃々の聲已に出ること盡て唯腹中に響あるばかりなり乃橘皮竹茹湯一貼重さ十二錢にて作て與へらる二劑にして効を奏す。

柴胡桂枝乾姜湯(柴圓、硝石大圓)の治驗

○續建珠錄

一、甲州人某嘗僑居于京師患瘧其初醫以爲外邪也與藥而差矣既而病者櫛頭疾復發煩渴引飲胸腹有動悸明日又愈愈又發如此間五六日矣衆醫數治數發皆不知爲瘧以爲邪熱依沐浴所致也遂求治先生曰此醫之誤也乃與柴胡姜桂湯(柴胡桂枝乾姜湯なり)服藥僅數貼疾去如洗

二、尼崎侯臣獺瀨氏女有宿癇一時患疫衆醫療之不差乃迎先生請治診之其腹有動頭汗出往來寒熱燥結便祕時時上衝昏冒不識人日夜如此兩三度乃與柴胡姜桂湯以柴圓攻之不幾日諸證盡瘳

○古方便覽

一婦人平生月經調らず氣上衝し兩脇急縮して腰痛忍べからず其經行んとする時は臍腹疞痛して下すこと豆汁の如く又米水の如し經水纔に一日或は半日にして止む如此もの十二三年なりと余診するに胸脇苦滿して臍上動悸甚し此方(柴胡桂枝乾姜湯を指す)及硝石大圓を作て雜運む時に赤黑膿血を泄す服すること數月にして前症全く愈ることを得たり。

「註」著者にありては煎方は柴胡桂枝乾姜湯に桂枝茯苓丸或は當歸芍藥散を合方し兼用は下瘀血丸なり。

大柴胡湯(當歸芍藥散、七寶丸、柴圓)の治驗

○續建珠錄

一、浪華嶋之內賈人伊丹屋某者嘗患腹痛中有一小塊按之則痛劇身體尪羸面色青大便難通飲食如常乃與大柴胡湯飲之歲余少差於是病者徐怠慢不服藥既而經七八月前證復發塊倍于前者頗如冬瓜煩悸喜怒劇則如狂衆醫交療不差復請治先生與以前方兼用當歸芍藥散服之月余一日大下異物其形狀如海月色灰白形有似內空虛可以盛水醬其余或圓或長或大或小或有似紐或黃色如魚餒或如敗肉千形萬狀不可枚擧如此九日而後舊痾頓除

「註」此症初頭より二方を合用したらんには著しく經過を短縮せしならんに古人の多くは合方の有利なるを知らざりしは惜むべし而して余も亦之れに類似の治驗あるを以て左に其一二を掲げん。

一、今を去る六年前年六十の一婦人を診せり病者曰く妾弱年より月經短少貧血にして其爲か未だ嘗て姙孕することなかりしが十數年前より胃瘧便秘を病み爾來醫治至らざるなきも更に其效なく近來某縣立病院の治を受くると雖も亦然りとて某より交付せられし處方箋を示す余之を見るに胃癌の診斷(無論歐宇にて)にて制酸消化鎭痛の藥を配せる水散の二劑なり診するに胃內に停水あり左直腹筋攣急し按壓すれば劇痛を發し且胃部に徹痛すS字狀結腸部には索狀の硬結物あり按ずれば亦疼痛す脈は沈弱無力にして貧血甚だしく其色澤恰も白蠟の如し余曰く此症は積年の月經障碍により瘀血下腹部殊に腸管に凝滯して便通を妨げ又之より反射的に胃瘧を發するものにして斷じて胃癌にあらず故に其病原たる瘀血を驅除するときは治を得るや明なりとて當歸芍藥散を三倍に增量して與へしに服すること一日にして胃痛全く止み新にS字狀結腸部に劇痛を發し苦悶多時に後圓形暗黑色鷄卵大の腹血塊を便すること四個にして疼痛漸く緩解す爾來服藥すれば必らず前の如く疼痛苦悶を來し或は塊物を下し或は之を吐出す斯如くなること十日餘にして其數百二十個に達するに至れり病者親戚共に余の診斷の的中には敬服すと雖も瞑眩持續の久しきに恐れを懷き他醫に轉したるが後聞く處によれば衆治効なく遂に死に歸せりと余當時術未だ熟せざりしを以て是非なきことは云ひながら半ば成功したりし病者を逸したりしは返すがへすも遺憾千萬なり今にして之を考ふれば當歸芍藥散は元より適方なりと雖も之れのみにては其力緩弱にして急速に瘀血を排除し得ざるが故に却て瞑眩を增强せしむるものなれば之に有力なる

下瘀血丸を兼用せしならんには斯る弊害を生せざりしなり。

二、三十三才の婦人來院し曰く數年前より下腹部に塊物ありしが近頃急に增大し且臍の右側及び腰部に於て疼痛を感ずと診するに面色微帶黃蒼白色脈沈弱にして腹部には下腹より臍を經て右肋骨弓下に達する(腫瘍の上界は肋骨弓の下約十仙米突の處にあり)隋圓形滑澤にして著しく腹襞を膨隆せしめたる硬固の腫瘤あり余腹證に據り柴胡桂枝乾姜湯當歸芍藥散(五倍)當歸四逆湯(二倍)の合方に下瘀血丸(五、〇宛一日三回)の兼用方一週間分を與へて曰く腫瘤の或程度迄の縮小は保證する處なりと雖も其絕滅は恐くは不可能事ならんと然るに次回に診すれば驚くべし腫瘤の殆んど全部は其影を潛め僅に痕跡を殘すのみなり前方を與ふること又一週日にして殆んど愈す。

二、一男子卒然氣急息迫心下鞕滿腹中攣痛但坐不ㇾ得ㇾ臥微嘔小便不利與以ㇾ大柴胡湯ㇾ諸症悉愈

三、一男子患ㇾ大頭痛ㇾ心下堅滿按ㇾ之痛時時欲ㇾ嘔眼中赤眩不ㇾ能ㇾ視ㇾ物舌上黑胎不ㇾ大便ㇾ十余日不ㇾ欲ㇾ飲食ㇾ則與ㇾ大柴胡湯ㇾ大便快通諸症稍雖ㇾ退頭痛如ㇾ舊後兼ㇾ用七寶丸ㇾ全愈眼中赤及び眩不ㇾ能ㇾ視ㇾ物症の柴胡劑證たることは少陽之爲ㇾ病口苦咽乾目眩也と少陽中風兩耳無ㇾ所ㇾ聞目赤胸中滿而煩者云々と說けるによりて明にして且舌上黑胎不ㇾ大便ㇾ十余日不ㇾ欲ㇾ飲食ㇾ の症あるを以て大柴胡湯を與へたるものとす。

四、一男子卒患ㇾ腹中痛ㇾ渴而時時嘔不ㇾ大便數日小便快利短氣息迫頭汗不ㇾ止舌上黑胎心下鞕滿按ㇾ之痛不ㇾ欲ㇾ近ㇾ手四肢微冷脈沈結乃與ㇾ大柴胡湯ㇾ服ㇾ之大得ㇾ治驗

○方技雜誌に曰く

余三十歳ばかりの時岡田炎藏へ書牘を贈るとて几案に向ひ居りしに夜半ごろ卒かに惡寒戰慄せり家眷は皆臥しぬ爐火も滅へたれば溫まることならず藥も服せず衾を引蒙り寢たれども戰慄甚しく褥上より振り落さるゝ樣也翌朝までに咽喉腫れ塞がりぬ是所謂急喉痺也早速に家兄蘿齊に診を乞ひけれども咽喉より口まで凝腫して口を開くこと能はず故に咽中の樣子を眎ることも喉痺針を刺すこともならず其上嘔氣つよく藥を用本道一先生を迎へたれどもやはり咽中を眎ることなし一滴の水も通らず治療を施すことゆること能はず熱氣さかんに咽啞して聲音少しも出でず腫痛甚しく創處破潰し夫より言語通じ嘔氣減じて粥も通一切ならず但苦みて居たり然るに四日目の夜一咳嗽にて創處破潰し夫より言語通じ嘔氣減じて粥も通りぬ乃桔梗湯加大黃を用ゆ血氣盛の時にて苦痛も三四日の間故疲勞甚しからず飲食進むに隨ひ六七日の間に復故せり據なき病人ありて風雪を侵して出ければ咽喉復微痛して聲音鼻へ漏し言語一切辨せず看護の者驚怖しけれども余但腫痛あるを以て前方を仍貫す二旬を經て尙愈へず因て仰臥して腹を診察するに胸肋妨滿して心下痞塞腹拘急せり涎沫を吐し嘔氣もある故咽喉聲音に拘らず大柴胡湯を用ゆることと一月許にして聲音出て患る所洗ふが如し以後四十年何の患もなし諸病とも腹證に隨ひ藥を用ひ治すること此の如し。

「註」此症は最初に鼻中より咽中に向つて桔梗白散を吹入し次で大柴胡湯桔梗湯今方を用ひ最後に大柴胡

湯のみを持長すべかりしものなり。

○古方便覽大柴胡湯條下に曰く

一、一男子年四十餘卒倒して人事をしらず醒て後半身不隨舌强て語ることを得ず諸醫効なし余これを診するに胸脇痞鞕し腹滿甚しくして拘攣すこれを按ば手足に徹せり乃此方を作て飲しむること十二三日にして身體略よく擧動す又時々紫圓にて攻ること二十日許全く愈ることを得。

二、一酒客年五十餘久しく左脇下鞕滿して大さ盤の如く腹皮攣急して痛み時々發し煩熱喘逆して臥すことあたはず面色痿黄し身體羸瘦す丙申の春潮熱を發し火などにてやくが如くおぼえて愈ざること五十餘日余乃此方(大柴胡湯)を作て飲しむること凡五十余劑にして其熱稍退又時々紫圓を以てこれを攻む病者信じて前方を服すること一年許にして舊痾盡く除。

三、一婦人年三十四五熱病を患ること十八九日譫語煩躁して安からず熱減せず飲食することあたはず諸醫必死とす余診するに胸肋妨脹して拘攣す乃此方をあたへ六七日にして腹滿去て食進み出入二十許にして全効を收む。

○叢桂亭醫事小言

一、士人の室潮熱舌黄身痛飲食乏しく夜になれば譫語すと云ふ足より浮腫して及ㇾ周身面目ㇾ家人等驚きさはぐ療醫以爲疫と水と合發す不ㇾ可ㇾ救余に乞ふ脈沈伏す時乾嘔粘唾唇口皮卷て下を失ふなりと大柴

白虎湯白虎加黄連湯の治驗

胡を與ふ一日に二三下ると兩日ばかりにて熱除く腫はいつとなく消して全快したり。

白虎湯.白虎加黄連湯(柴胡桂枝湯芎黄散)**の治驗**

○生々堂治驗に曰く

一、西洞院竹屋街北近江屋某兒中暑身灼熱煩渴四肢懈惰一醫與ㇾ白虎湯二旬餘日猶不ㇾ効先生曰某氏之治非ㇾ不ㇾ當然其所ㇾ不ㇾ治者以ㇾ劑之輕ㇾ也即陪ㇾ前藥ㇾ與ㇾ之貼承十錢須臾發汗始ㇾ流至ㇾ明日ㇾ善食不ㇾ日復ㇾ故

二、車屋街南菱屋與兵衛年六十冬月一日幹事紛冗不ㇾ暇食及昏飢甚後喫ㇾ飯後將ㇾ浴卒倒ㇾ于湯中ㇾ家人駭遽扶起灑ㇾ水其面ㇾ乃蘇時四肢微冷肌膚粟起舌上燥裂猶善飲熱湯醫以爲ㇾ中寒參附交投病勢愈加ㇾ劇師診之脈微欲ㇾ絶心下石鞕舌生ㇾ黄胎即試與ㇾ冷水ㇾ飲ㇾ之病者甘盡ㇾ一盂ㇾ因與ㇾ大劑白虎湯四貼ㇾ翌日來報曰大汗如ㇾ雨衣被濕透寅尾峻瀉如ㇾ傾及至ㇾ今朝ㇾ渴已諸症大退服ㇾ前方ㇾ凡三十餘貼復ㇾ故

○續建珠錄に曰く

一男子患ㇾ疫四日發狂不ㇾ識ㇾ人事ㇾ妄言大渴不ㇾ欲ㇾ食下利日五六行腹皮著ㇾ背狀如ㇾ虎脫ㇾ胸中煩悸脈微弱乃與ㇾ白虎加黄連湯ㇾ服二三日妄言止不ㇾ下利六七日諸症全愈

○古方便覽白虎湯條下に曰く

一、一男子年二十熱病二十日許大熱煩渴して水數升を飲んと欲し頭痛破るが始く妄言狂呼して衣を棄て走んとす余此方三劑を與へて汗出熱去りて病者困倦すること死狀の如し因て復診するも前證皆除て但

胸脇苦滿して上衝尤甚し更に柴胡桂枝湯及び芎黄散を服せしめて愈て復常す。

二、一男子年五十忽發狂し罵詈すること親疎を避ず高に發て歌ひ衣を棄て走り遍身燥熱して煩渇引飲す余此方を與へ又鼠霜一錢巴豆八分胡椒五分右三味を丸し二錢をあたへてこれを攻れば蚘を出すこと數升にして痰頓に退き二十日にして全愈。

三、一女子四才腹滿甚くして下利日に數十行口渇して冷水を飲ことを好み恣に瓜果生冷の物を食肌肉黄瘦して愈ざること半年所余乃白虎湯及び柴圓をあたへのましむること凡五十劑にして諸病全愈。

白虎加人參湯の治驗

白虎加人參湯の治驗

○生々堂治驗

艸厪先生年七旬病消渇引飲無度小便白濁周殫百治而瘁疲日加焉舉家以爲不愈先生亦弟囑後事會先生診之脈浮滑舌燥裂心下硬曰可治矣迺與白虎加人參湯百余貼全愈

大承氣湯治驗

大承氣湯(柴胡加龍骨牡蠣湯、大青龍湯、柴胡桂枝乾姜湯、半夏瀉心湯、瀉心湯)**の治驗**

○溫疫論に曰く

朱海疇正(正は本妻なり)年四十五患疫得下證四肢不舉身臥如塑(塑は土人形なり)目閉口張舌上焦刺問其所苦不能答因問其子兩三日所服何藥云進承氣湯三劑每劑投大黄兩餘不効更無他策惟待日而已待日は運まかせにしていることなり)但不忍坐視更祈一診余診得脈尚有神下證悉具藥淺病深也病重きに藥の分量少なき爲に効がないのであると云ふ意なり)先投大黄一兩五錢(之れは只大黄のみを投じたるにあらずして大承氣湯方中の大黄を一兩五錢に增量したるなり)目有時而少動再投舌刺無芒口漸開能言舌焦少去神思稍爽四日服柴胡清燥湯(吳氏は柴胡清燥湯を用ゆと雖も仲師の柴胡去半夏括蔞湯を與ふるを宜しとす)五日復生芒刺煩熱又加再下之七日又投承氣養榮湯(吳氏が承氣養榮湯を用ずと雖も小承氣湯當歸芍藥散合方にて可なり)熱少退八日仍用大承氣肢體自能少動計半月共服大黄十二兩而愈又數日進糜粥調理兩月平復

○方技雜誌に曰く

一、本石町近江屋三左衛門の主管傷寒にて治を請ふ之を診するに病人何かぶつぶつ言ひながら立騒ぐを家人抱き止めやうやく床上に臥さしめたり其症腹滿大渇舌上乾燥齒齦までも黑色にて錯語やまず二便不利脈沈微なり因て大承氣湯三貼を與へ下後復來り診すべしと云ひ歸りぬ間もなく人來り申は只今前醫來り診して申すはかかる病人なれば人參劑にても用ゆべきかと思ふ處へ大承氣湯とは餘りの違ひなりと申候病人は近江屋にて兩親兄弟これ有候故萬一の義あり候ては後日彼是申すやう計り難く候故伺ひに參れりと申す余其者に言けるは右樣の病症に人參を用ゆることは後世の醫書にも有まじしかし此方に遠慮なく何なり共心得次第に用ゆるが宜しと言ふて歸したりしが衆議決定して大承氣湯を用しかば臭穢黑便夥しく下り三日目には精神頗爽然となりぬ但夜間恐驚して安眠せず因て柴胡加龍骨牡蠣湯

を用ひ三十餘日にて快復せり病中のことを尋ねんに諸國より諸品澤山着船していそがしきこと限りなく病苦は一向覺へずと申しき病中度度起きて騒ぎしは夫故也とぞ箇樣の症に人參などゝ云ふ醫者ある故遂には大病に仕立つる也人參を飲まんよりは天然の白虎湯（香川秀庵氏曰く水は天然の白虎湯なりと故に此言ありたるなり）が增しなるべし班盃堅が疾有て治せず常に中醫を得（病に醫治を加へず自然の經過の儘に放任するときは中等の醫者の治療を受けしと同程度の効力あるものなりと云ふ意にて洋方の治療法は多く此主義に則るものなり）と云ひしは尤のこと也。

二、安政二年乙卯の冬十月鍛冶町相模屋婦大疫にて治を乞ふ余大青龍湯を與へ汗を收らしめたれども熱勢挫けず追々進み妄言錯語狂人の如し因て大承氣湯を用ゆ其夜半大地震にて居宅も土庫もつぶれたり家内錯愕して戸板に病人を載せ逃げ出たり然れども外にも置れず遠方なれども麻布の親類まで載せ行きたりしに其家もつぶれて入ることあたはず餘義なく又引かへし小網町の出店へ漸く曉天に載せ來れりこゝは幸につぶれず始めて安寢を得たり此騒動のうちに相模屋は類燒にて灰燼となれり翌朝余が方へ人來り余往て診するに風寒のさはりもなく外に別症も見はれず因て尚大承氣湯を與ふ六七日過ぎて精神たしかになり何故に他家に在りやと問ふ因て大地震の事を話し聞かせければ病人大に驚きたり半月ばかり出店に滯留してよほどよくなりさしかけの宅へ歸れり三十日余にて全快したり此婦は地震の爲にもつぶされず夜中遠方をかつぎまはしたるに其さはりもなく大病の渾治したるは眞に幸福と云ふべし。

三、阿州藩柴田幸右衛門の妻時疫にて惡熱譫語舌黑乾縮す人事は少しもわからず余大承氣湯を用ゆ八九日目より不食となり一滴の米飲も飲まず家内の者さまざますれども藥の外は何も食せず余前症にて方を處したる故不食にかまはず始終大承氣湯にて拔きつけたり家人も親戚もあやぶみけれども邪毒を取り除くが第一也と說き示し頻に承氣を用ひたり半月餘に至り精神少しくたしかになり始て米飲を用ゆそれより追追食氣出づ其後は柴胡姜桂湯（柴胡桂枝乾姜湯なり）を與へ四十餘日にして復故せり母親病人に言ひけるは十七日の間米飲一滴も飲まざる故大に心配したりしが不思議に快復したりと語りければ病人申すは十七八日の間毎日寺寺を廻り蕎麥麵の馳走にてひもじきことは更になかりしと云へり奇症と云ふべし此年姙娠し翌年一子を擧ぐ。

○古方便覽大承氣湯條下に曰く

一、一小兒生て五十日許卒然と啼聲を出さず目を見つめ煩悶して驚風（腦膜炎）の證に似たり紫圓を用ること三日にして治せず其腹を按に堅滿して石の如し即大承氣を用ひて愈たり。

二、一男子年五十餘胸痛すること三四日偶上巳の日にあたり大に醉て忽然として口言ことあたはず心中煩悶して反覆顚倒す腹痛の狀あり余診するに腹中堅滿す乃備急圓三錢をあたへて愈ざること三時許後には其人伏して動かず肩息して吐せんと欲して吐せざるの態あり手足冷衣を循牀を摸り將に死せんと

す又眞武湯三劑を與へて諸症稍退く後一日ありて言語することを得たり六七日にして全く治せり余謂く治は則治す恐くはこれ偶中ならんと乃先生に問ふ先生の曰其治にあらず始に大承氣湯を用る時は此に至らずと後半歳にして其人復前證を發す余即大承氣三劑をあたへて疾立どろに愈て再び發せず拾遺是乃知先生の用方に察なるうまく長沙氏(仲景師を指すなり)の室に入ることを。

三、 一賈人年六十歳熱病を患ふ諸藥雜投して日に增劇し十七八日にして耳龍目瞑して人を知らず唇焦舌黑膽妄燥渴唯冷水をもとむ水入る時は嘔噦す手を揚げ足を舞す病勢危きこと甚し家只斃を待の外なし余其腹を按せば鞕滿して疼痛の狀あり乃大承氣湯三劑を作て飲しむ其夜燥屎五六枚(枚は塊の意なり)を下す明早目明に耳聞くことを得始て人事を知る然ども口渴いまだ止ず猶冷水を飲んと欲す余禁せず許して飲しむるに三日に至て復飲ことを欲せず前方をあたへ服せしむること十餘劑にして諸症日に除復診するに心下痞鞕し腹中雷鳴す更て半夏瀉心湯及び三黃丸(瀉心湯の丸劑なり)を作てこれを飲しめて病全く瘳。

四、 男子年四十餘熱病十八九日口言こと能はず目視ること正く得ず身體動かず手足清冷なり諸醫醫症となして蔓附の輩(人參附子配合の劑なり)をあたふるに寸効を得ず余診するに兩脈蜘蛛絲の如く將に絶んとす其腹を候に臍下物ありて磊磈(ライラ)(ごろ〳〵)たり乃大承氣湯を作て飲しめ燥屎五六枚を通じて諸症頓に退。

桂枝茯苓丸及桂枝茯苓加大黃湯の治驗

「註」著者曰く此症は大承氣湯正面の證なるに腹診を怠り只足清冷の症を見て正反對の陰症となし蔓附の劑を與へて益病毒を激せしめ遂に脈厥の險症を誘致せしは誤治の甚しきものにして六角氏をして名を爲さしめたるは宜なりと云ふべし。

五、 一婦人傷寒を患て譫語狂笑して清水を下利すること日に數十行諸醫療することあたはず余診するに腹鞕滿にして按ずれば痛むこと甚し乃此方を作て連に進むること三劑にして利即止て諸症並に除く。

一老人偏頭痛を患ふ其痛刀にて刳(エグル)が如く治せざること四十餘日諸醫療することを得ず余診するに腹鞕滿して大便通せざること十四日舌上黃胎面目黧黑乃此方五劑をあたへて下利すること五六行諸證頓に退き六七日にして全く治したりこれより腹滿して偏頭痛するものにあへば此方をあたへて功を得ずと云ふことなし。

六、 一男子年五十腹堅滿にして切痛す時正に嚴冬なり醫寒中となして四逆湯を用るに功なし余此方をあたふるに一飲して其痛即止再飲して病全く愈。

桂枝茯苓丸及桂枝茯苓丸加大黃湯(大黃蟅蟲丸)**の治驗**

○生々堂治驗に曰く

一、 一婦人年三十久患頭瘡臭膿滴滴流而不止或髮粘結不可梳醫因以爲徵毒攻之不愈痛痒無止請之先生其脈弦細小腹急痛引腰腿曰瘀血也投桂枝茯苓丸加大黃湯兼以坐藥不出月全瘥後一夜腹痛二

三陣大下ニ畜血ニ云

「註」然れども著者にありては兼用方は下瘀血丸或大黄蟅蟲丸或抵當丸なり而して洋醫方にありては此等の症を純粹の局所病となし內治を忘れて外用藥の撰擇に汲々たるは主客本末を顚倒するの甚しきものと云はざるべからず

二、醫人藤本氏之妻始患ニ瘟疫ニ餘邪不ニ除者有ニ日矣神氣幽鬱動作懶飲食不ニ進好在ニ暗處ニ(中略)先生診ニ之脉細而有力少腹急結曰邪已除矣今所ニ患唯血室有ニ殘熱ニ也(中略)即與ニ桂枝茯苓丸加大黄湯ニ復來曰諸症雖ニ退更罹ニ痢疾厄ニ腹絞痛裏急後重所ニ下赤白糅然先生復診ニ之曰鳴胡藥湯之證也與ニ十又三貼ニ果下ニ蚘蟲數條ニ乃愈

「註」之れは窒扶斯後の熱溶血症の輕度なるものなり若し一見神經衰弱或「ヒステリー」となし瘀血を驅らざらんか其禍害計るべからざるなり。

三、新街二條南山下惣左衛門之妻年四十餘每ニ月事下ニ必先腹痛與ニ桂枝茯苓丸加大黄湯ニ繼又用ニ坐藥ニ數日前陰出ニ血塊ニ數個大者類ニ鷄卵ニ小者兎屎ニ月餘乃已

「註」余にありては兼用坐藥にあらずして驅瘀血丸方なり而して此處は所謂月經因難症にして洋方にありては姑息的對症療法の外根治法のあるなし宜しく古方に就て學ぶ處なかるべからず。

○續建珠錄に曰く

一婦人身體羸瘦腹中攣急經水少而不ニ絕上逆目眩飲食如ニ故大便秘結唇口乾燥乃與ニ桂枝茯苓湯ニ兼ニ用蟅蟲丸ニ經ニ日諸症全愈

「註」著者も亦之に類する一治驗あり十六才の女子未だ月花來潮せず身體羸瘦貧血し時々上逆眩暈輕度の四肢の痙攣を發し精神幽鬱夜間安眠せず恰も肺結核初起の如し余桂枝茯苓丸の煎湯に大黄蟅蟲丸を兼用して與ふること三週にして月經潮來し諸症全愈せり。

○方技雜誌に曰く

(上略)然れども余七才の女兒の經行を療せしことあり服藥十餘日にして治せり此女は其後十四五才にて經行になりそれよりは滯りなく十七八才の時初て一子を產せり又二才の女子の經行ありしをも療せり初は小便血かと疑へり因て牝戶を檢視するに經水なり恂に希代のこと也二人共格別異る症もなし因て但血の妄行と見て桂枝茯苓丸を煎湯にして用ひ不日に愈たり奇症恠候常理を以て論ずべからざることあり。

「註」按ずるに此症は眞性の月經にあらずして子宮の主要血管の一部に血塞を生じたるが爲副枝血行の血壓增强して子宮出血を來したるものならん然れば此方の應効ありしは當然にて奇症恠候と稱すべきにあらざるも解剖病理の素養なき漢醫なれば之を解決し得ざりしなり。

當歸芍藥散(承氣丸、乾姜半夏人參丸、柴胡桂枝乾姜湯、小靑龍湯、大黄蟅蟲丸)**の治驗**

一、藝州人某患腹痛來謁于先生自手按其腹良久而謂曰僕自得此痰索醫於四方吐下鍼灸無不極其術雖然百事無效曠日七年今來浪華賜公一診雖死無怨矣先生診之從臍傍至胸下攣急疞痛日夜無間斷乃與當歸芍藥散三日沈痾頓去

從臍傍至胸下攣急は左直腹筋の攣急にして腹痛症も亦左側に偏して起りたるものなり。

二、婦人年二十三左足攣急百日許二日上攻吐不能語言醫爲脚氣療之不治先生診之胸腹有動從小腹至胸下攣急小便不利乃作當歸芍藥散與之二貼上攻稍弛言語復常腹痛仍依然因與消石丸食頃二便快通屎色如血諸證漸除月餘全瘳

「註」從小腹至胸下攣急は矢張左直腹筋の攣急にして兼用方は余にありては下瘀血丸なり。

三、一婦人足指疼痛不得行步一日腹中攣急上衝干心絕倒不知人事手足溫脈數兩便不通則與當歸芍藥散爾後小便快利色如血諸症頓除

「註」此症は瘀血病原にして之が下肢に下りては疼痛を起し頭腦に上行しては腦貧血を發したるものなり

四、浪華久太郎街賈人大和屋某妻年三十餘經閉二年許形如枯蛙咳吐白沫飲食不進衆醫療之百方無効一日發乾嘔飲食藥汁不得下以故諸醫束手因迎先生診之其脈沈微而數蒸蒸發熱四肢困倦而懶動作乃令服參夏丸及湯(乾姜半夏人參丸方は丸方にても煎方にても用ゆるものなるが故に丸及湯と記したるものにして此場合には恐くは丸方として與へしならん)五日乾嘔殆已矣然困倦轉甚不能自轉側更服當歸芍藥散兼以前方後十餘日便閉五六日屢登厠而不得利自欲服通劑(通劑は下劑なり)一醫以爲可矣因請先生先生不可益與前方二月而後得快利然諸證仍未除反臍傍見塊胸腹生動心下痞塞不能飲食革與柴胡姜桂湯數日病減半時偶惡寒甚忽焉咳倍干始晝夜味吐白沫二三合乃作小青龍湯與之經二旬餘咳大減於是再服當歸芍藥散旬餘經水始來爾後經百餘日而瘳

五、一婦人年二十餘歲去春以來絕食穀肉之類一口不能食若食則心下滿痛或胸中滿痛(胃の下部と上部とにより或は心下と云ひ或は胸中と稱したるなり)吐之則止每好飲或熱湯或冷水若過飲則必腹痛而吐水過多腰以下羸瘦甚胸以上如平人行步不異于常按腹臍傍少腹堅恰如石大便秘結若用下劑則徒水瀉而已月水不來其婦自言苦腹滿按之不滿(病者下腹部の膨滿を訴ふるも他覺的に之を認めざるものは瘀血あるの候なり)則與茯苓澤瀉湯兼用消黃湯(大黃芒硝二味の煎劑なり)服之五六十日渴減小少食糖菓腹痛如故微咳吐絡血(代償性咯血なり)後投當歸芍藥散兼用蜜蟲丸(大黃蜜蟲丸なり)諸症漸退

「註」此症は初めより茯苓澤瀉湯に當歸芍藥散を合方し大黃蜜蟲丸を兼用すべかりしものなり。

六、一婦人月經數日不止或月再見(一月に月經の二度あるを云ふ)肩背凝腹中攣急或鞕滿飲食大進大便秘結時時陰門痒患之數年百治無効與當歸芍藥散兼用蜜蟲丸大奏治効

七、一男子眩不能立胸下鞕痛肩背强如入板飲食如常大便秘結則與當歸芍藥散服之數日諸症悉愈

桃仁承氣湯（抵當丸、吹鼻散、人參湯、葛根加桔梗湯、梅肉散、茯苓建中湯、桂枝茯苓丸、芍藥甘草附子湯）の治驗

○生々堂治驗に曰く

一、京師油小路五條北近江屋勘助之妻總身發瘡大者如錢小者如豆色皆紫黑日晡所必發痛痒又牙齦常出血先生診之臍下拘痛徹腰與桃仁承氣兼坐藥前陰出膿血數日乃痊

「註」著患なれば兼用方は下瘀血丸なり。

二、一人走來叩門謂先生曰急事矣請速來倉皇不告其故而去先生至則堂上堂下男女狂躁一婦人斃在傍先生怪問之曰今一忘八年少屢來求貨財不知屢我今詈之忘八狂怒奮起將打我拙荆驚遮之當其前渠搤其喉直斃而忘八駭走事甚急矣先生速來幸甚即先生命傍人令汲冷水盈盤枕之灌水頸項半時而後刺之即蘇更令安臥而又浸巾水敷其頸覺溫乃換使瘀血不凝血也與桃仁承氣加五靈脂湯而去明日復往視之婦人大喜且謝曰妾幸蒙神救得不死今咽喉尚無恙唯胸肋體濕微覺疼耳飲食如常師復令灌巾冷水匝脇肋如初經三日愈

「註」頸部を絞搤せられて窒息せる程なるに由り皮下及筋肉内に出血多きを察し血液は暖ければ凝固を早め冷却すれば之を遲延するの生理的作用を熟知して先づ水を以て冷却して其凝固を防ぎ次に瀉血を以て之を蘇生せしめ後殘餘の瘀血を桃仁承氣加五靈脂湯（桃仁承氣湯に五靈脂を加へたるの方なり而して五靈脂は寒號蟲の糞にして驅瘀血劑なり）用ひて體外に驅除したるは恂に超凡の手腕と云ふべし進歩せる科學的醫學なりと誇稱する洋醫家果して此治手段を有するか。

三、一男子年三十遇冤下獄首不受櫛者久矣會赦而出體瘦骨立不勝衣帶忽然閉戸不接人者有日焉傷寒戰汗一伏時四肢微冷而如獨與鬼言者狀先生診之小腹急結小便頻數曰熱結膀胱也與桃仁承氣湯六貼其夜大衄而又下血數合而諸證罷向所抗慨亦勝然如忘

「註」田獄後體瘦骨立せる上尚腸室扶斯に罷れる者に此下劑を與へて害なきのみならず反て卓効あり以て腹證的古醫方の至妙なるを語るべきなり。

四、一婦人滿腫醫爲脚氣專投利水劑以虞變於衝心不中疾益甚師脉之沈細小腹急結按之其痛徹前陰與桃仁承氣湯其夜半大腹痛泄瀉七八行四日腫減過半與前方數日收効

「註」之れは瘀血より水腫を來せるものなるを以て根本を攻めしが故に枝葉は隱ふて自滅せしなり。

五、間街五條北釜屋伊兵衛之妻半產後面色黎黑上氣頭暈先生診之脉緊心下悸臍下結鞕曰此有畜血也即與抵當湯三日覺腰以下甚解怠更與桃仁承氣湯果大戰寒有頃發熱汗出譫語四肢緤搦前陰出血塊其形如雞卵者六日間約二十餘仍用前方二旬宿疾如忘

「註」余にも亦之に類似の一治驗あり四十餘才の婦人なりしが腰痛及下肢の丘疹（五錢銀貨大より一錢銅貨大のもの數十にして左下肢に多し）を主訴として來院す診するに小腹急結臍下鞕滿の腹證あり經血短少及便閉すと云ふ余桃仁承氣湯に抵當丸を兼用として五日分を處せんに腹痛と共に大小の血塊を下

し前症洗ふが如くに去れり。

六、 堺街蛸藥師南近江屋清兵衛使人請師曰有旅客卒然發疾師往視之其人年四十許呼吸短息咽中有細聲四肢厥目睛不轉心精漂漂乎如懸旌之任風初發時奔走室内妄叱狂喝有制之者輒嚙之勢不可響邇及先生至纔能得制之先生以刀破其曲池血不出又刺膏肓入可寸出血一二滴又刺口吻黑血湧出於是大勢稍退因切其脈散亂不可名狀曰暴瘧也與桃仁承氣湯三貼（貼重六錢）焉有少頃焉來報安放

「註」余も亦之に類する二治驗を有す生來白痴なる二十四才の女子平素月經稀少に便閉甚だしく時々狂的發作を起し兄弟姉妹を撲ばず亂打或は器物を破壞す其父大に之を憂へて診治を請ふ診するに少腹急結甚だし據て桃仁承氣湯を二倍して與ふること三週日便通經血共に順調し發作全く歇止す。

七、 醍醐村有道士名戒善其妻年可四十總身發黄以故醫者妄名黄疸先生按之至其臍下則言痛不堪與桃仁承氣湯十餘日全已

「註」此症は著者未だ經驗なしと雖も恐くは血性黄疸なるものならんか。

八、 攝津大坂植木屋治兵衛者年三十迎先生請治曰予始患瘧疾爾來二年間通身蒸蒸煩熱不已又時覺兩脇下有一塊衝心切痛不能禁輒暈轉自投地更醫數四或以爲風濕或以爲癇嘗聞先生芳譽故來累先生願請一診先生廼脈之數而有力按其小腹則痛面色暗黑而口吻爲最甚謂之曰大便甚黑乎曰然小便甚頻數乎曰然（中略）夫以面色如煤口吻如蛭大便黑色小便頻數是其血症之諦也若與桃仁承氣湯必治矣

病者曰前年嘗大下血三日而宿疾全退春來復如此然則先生之言當矣（中略）乃行前方不日有奇効

「註」桃仁承氣湯は調胃承氣湯に桂枝桃仁を加へたる方なるが故に通身蒸蒸煩熱不已が如き調胃承氣湯類似の症を發せしは當然にして大便黑及び小便頻數症の血證の徴候なるは仲師が抵當湯條に太陽病六七日表證仍在脈微而沈反不結胸其人發狂者以熱在下焦少腹當滿小便自利者（小便頻數の意なり）下之血乃愈と說き又陽明證其人喜恕者必有畜血所以然者本有久瘀血故令喜恕屎（大便なり）雖鞕大便反易其色必黑と云へるによりて明にして此證の候外尚少腹急結の腹證ありたるを以て桃仁承氣湯證と斷定したりしなり。

六、 佛光寺火宅僧妻雙眼澁痛不開先生診之小腹拘急與桃仁承氣湯兼用吹鼻散一日大衂眼疾全愈

吹鼻散

瓜蔕　皂莢　各等分

右末搐之鼻內

「註」桃仁承氣湯の眼疾を治すること多きは余の常に實驗する處にして深く論ずるの要なきも吹鼻散を兼用したる所以は恐らくは鼻粘膜腫脹の因によく鼻淚管を閉塞せしめ淚囊炎を起せるものなるが故に左の瓜蔕能力を利用し此管を開通して淚囊炎を治するの目的に出でたりしものならん而して瓜蔕は獨り吐劑として有力なるのみならず組織より水氣惡汁を奪收するの性あるを以て鼻茸に吹鼻して之を縮小

せしめ或は鼻粘膜の腫脹等に因する頭痛眼疾等に應用して奇効あり皂莢も略同性を有するを以て配用せしなり洋醫家涙管「ぶーじー」の何たるを知らざる漢醫に此治手段あるを悟り洋方偏執の妄見を打破せよ。

○生々堂醫談に曰く

一、京師竹屋町衣棚東角下駄屋與兵衛妻初め吐瀉盆を傾が如く狀霍亂に似て全身氷の如く厥冷し脈絶せんとする事半日煩躁して衣を着すれば投じ去る不食大渇水を欲すれども與れば必ず吐す如此事四五日尚死せずして依然たり余往きて見れば前醫の與ふる所の附子理中湯尚一二貼爐邊に剩せり其腹を診するに臍下石の如く鞕し余曰く是血症なり理中湯は與ふべからずと既に煎じたる理中湯の藥汁を流し捨て別に桃仁承氣湯を作て服せしめしに臭穢の物を多く下して三日の內に厥回り諸症退て全愈す其後二年を經て又發すること前の如余又桃仁承氣湯を與へて愈たり。

「註」之れは胃腸血管に拴塞を來し血流絶止したるによりて發起せし疾病なるが故に此方を用ゐて其元因たる拴塞を除けば吐瀉厥冷等の症狀は治せずして消散する所以にして益に絶好の原因療法と稱すべく又古醫方は西洋醫學の原理に照されて益其眞價を發輝せらるるものと謂ふべし。

○續建珠錄に曰く

一、攝州吳田人吉田某者患疫迎先生請治診之脈微細身熱煩躁時時譫語口燥而渇大便秘閉乃與桃仁承氣湯爾後大下血家人驚愕而告于先生先生恬然不省益服前方不日全愈

「註」之は腸窒扶斯經過中熱溶血症を來せるにより發したる症狀なるが故に其元因たる溶血即ち變敗血を此方を以て驅除するときは結果たる症狀の自滅するは當然の理なり然るに洋方に於ては熱溶血症の原因を究むるや頗る精密なりと雖も療法に見るべきものなきは恰も佛作りて魂入れざるが如き療法ありて說明不充分なる漢方は魂ありて形不具たる佛像の如し是れ余が二醫學の融合統一を企圖する所以なり。

二、一婦人產後胞衣(胎盤なり)不下忽焉上攻喘鳴促迫正氣昏冒而不知人事自汗如湧衆醫以爲必死因迎先生診視之心下石鞕少腹濡眼中如注藍乃與桃仁承氣湯須臾胞衣忽得下至明日爽快如常

「註」手術によらざれば胎盤は下らぬもの位に誤想する洋醫家以て如何となす。

三、一男子年六十有五常患喘息咳唾不得平臥數十年一日有身熱或休或作數日不愈痰帶血出翌日齒縫出血連綿不止其色黑如紫以手引或一二尺或三尺劇則從鼻耳穴少出大便下黑血如齒齦日四五發一身無血色處處發斑其色紫黑絮如此三日三夜絶穀好飲正神如有如無平日所患喘息頓止得平臥然不能轉側乃與桃仁承氣湯不幾日而愈

「註」此症は恐くは肺其他の血管に血塞ありて發したるものならん著者嘗て一喘息病者を治したり二十才の男子なりしが數月前より喘息を發し醫治効を見ずと云ふ診するに大柴胡湯及桃仁承氣湯の腹證ある

を以て二方を合方して與ふること數日にして全治せり。

四、京都河東泉屋某母年四十餘患外邪三日舌上燥而黑獨語不能食醫下之下利日十餘行家人懼而更醫醫與養榮湯下利頓止爾後汗出而大渴引飲又更醫如此僅十日間更醫五六人愈病愈變於是病勢漸衰飲食不進每欝欝懶言語經十餘日大便始通其色黑而滑居三四日形體羸弱殆如不可救舉家益驚怖迎先生診之心下急迫腹微滿舌上深紅乾燥而渴大汗如流足跗微腫大便黑滑猶末已乃與桃仁承氣湯須臾下燥屎如漆者數塊諸證頓除但心下痞鞕不能飲食更令服人參湯至明日食漸進經月復常

五、京師一女子年九歳有寒疾求治先生門生某診之蒸蒸發熱汗出而渴先與五苓散服湯渴稍減然熱與汗尙如故其舌或黄或黑大便燥結胸中煩悶更與調胃承氣湯服後下利數行而煩倍加食則吐熱益熾將難救療先生曰調胃承氣湯非其治也此爲桃仁承氣湯之證矣服湯全瘥

「註」五苓散證には發熱汗出而渴症の外必ず小便不利の候あるものなるに之れが有無を慮らずして發熱汗出而渴症のみを以て五苓散證となしたるは第一の誤りにして又調胃承氣湯證と桃仁承氣湯證とは甚だ類似の症狀を發すること多くして小腹急結の有無を以てするにあらざれば鑑別する能はざるものなるに其如何を問はずして調胃承氣湯證と速斷したるは第二の誤なり。

六、浪華人忠次郎者其頂生瘍醫鍼之治焉其明日如寒疾狀發熱熾盛或惡寒爾後瘡根亦凸起自頂至缺盆(鎖骨下窩なり)悉見紫朱色譫語大便不通病狀最危篤一醫以爲溫疫療之不治乃請先生先生曰是非疫其所以似焉者以瘡毒上攻也乃與葛根加桔梗湯兼以梅肉散得湯稍差後再診之轉與桃仁承氣湯以梅肉散峻下五六行熱乃退蓋此人譫語煩悶眼中碧色者此血證候也

「註」此症は頭部化膿性炎症に續發せる胸竇の血塞性靜脈炎にして葛根加桔梗湯の應効少かりしは病毒の既に頭内に侵入し血塞性炎症を起せるものなるが故なり以て此方と桃仁承氣湯との別を悟るべく又梅肉丸等の巴豆劑が胸の劇性炎症を頓挫せしむる作用あるを知るに足るべし而して眼中碧色なるは頭蓋内欝血の一分症なるを以て血證即ち瘀血頭内に集積せる標徴なりとす。

七、一婦人好飲酒一日大醉忽然妄言恰如狂人後卒倒直視四肢不動呼吸少氣不識人事手足溫脈滑而疾不大便十餘日額上生微汗面色赤從胸中至小腹鞕滿不能食與桃仁承氣湯服五六日瞳子少動足得屈伸至七八日大便漸通呻吟十餘日諸症漸退

「註」此症恐くは腦動脈拴塞によるものならん。

八、一童子年八歳大吐食後發熱微汗出其明日無熱譫語咬牙煩躁尤甚嘔不能食四肢擘席胸肋妨脹按之無腹力兩便不通與桃仁承氣湯服藥後神氣復常諸症悉退

九、一婦人常患欝冒心中煩悸但欲寢飲食或進或不進一日卒然如眠不識人事脈微細呼吸如絶血色不變手足微冷齒閉不開二時許氣復呻吟煩悶言胸中有物而苦胸腹動悸甚脇下彎急則與桃仁承氣湯服得一晝夜十二貼下利數行諸症漸退後與茯苓建中湯全治

「註」茯苓建中湯は苓桂甘棗湯と小建中湯との合方なり。

○方技雜誌に曰く

一、婦人診を請ふ家人云ふ姙娠己に六ヶ月也先月首より瘀血下り衆治効なく三十日許にて産せんに溫熱故か子胎摩糜し逆産にて首よりちぎれ體ばかり出でたり其後種々すれども首は出でず恂に難儀千萬也何とぞ出し玉はれと申すにぞ之を診するに其人身體血色なく柴瘦して唇口乾燥脈微弱なり腹を按撫するに首がごろごろと游移遷轉して恰も水中に西瓜を浮べたるが如し余家人に謂て曰く强て出さんとて餘り腹部を按撫せば血暈を發すまじともいはれぬ故藥にて下すべしと云ひ其夜一宿して桃仁承氣湯を三貼用ひければ翌朝快利して首は忽ち出でぬ病者も家人も再生の思ひをなしぬ余も此の如き症を始て覩たり古方の妙なること誠に感嘆に堪へず此余が十三才より七十までひたすら古方を信仰して他念を起さゞりししるしならんと思へり。

「註」著者未だ此症の經驗なしと雖も古方の至妙なることは吾人意慮の外なるを以て疑ふべきにあらずと思考す。

二、一農家の婦産後痙攣を患ること三年也病中又姙娠したり腹の大きくなるに隨ひ虎子にも居られぬとて治を乞ふ余診し了り其母に曰く此症は産後ならでは速に治せず先腹部足部をゆるめ置きて産後に足の立つ樣にすべしと云ふ桂枝茯苓丸加大黄を煎湯にして服せしむ大便小便共に快利して氣分宜しく總

體にゆるみたりと云ふ其月末に滯りなく分娩せり産後は桃仁承氣湯に轉方したり惡露よく下り毒便晝夜二三行宛通し諸方閉塞の毒解渙し氣血も次第に宜通しける故腰も膝も追々動き二十日許の服藥にて起歩常の如くになりぬ古人曰跛者不忘起盲者不忘觀と病人の悦び云べからず又紀藩臼杵舍人婦同症を患ふ是も姙娠して甚困れり然し産は安らかにしたり余産後は桃仁承氣湯に芍藥甘草附子湯を兼用し二月許にして全治する産後の痙攣は復の産後に血液の新陳代謝の時に乘じ治療すれば其治甚速なり。

「註」此症は腹部及下肢血管内に血塞若くは閉塞性動脈内膜炎ありて神經筋肉の營養障礙せるにより發するものならん而して此病に對する著者の實驗的治法は證に隨ひて桂枝茯苓丸當歸芍藥散桃仁承氣湯大黄牡丹皮湯の如き驅瘀血劑を用ひ尚之に血行振起利尿緩和等の作用を有する芍藥甘草附子湯當歸四逆湯桂枝加茯苓朮附湯眞武湯八味丸を撰びて合方し尚兼用方として下瘀血丸大黄蠴蟲丸抵當丸を撰用するにあり。

大黄牡丹皮湯（大承氣湯伯州散甲字湯）の治驗

○生々堂治驗

一、上立賣室街西小泉源五者男年二十又一一日更衣忽腹痛旋四肢急縮不能屈伸家人聞其悶呼就視之昏絶四肢厥即扶之臥室内迎醫鍼灸徐徐而厥反脈應腹復迸痛悶呼不可聞脱門脱出直下如腐爛魚腸

者膿血交之心中懊憹食飲不下咽醫爲禁口痢療之數日時聞先生多奇術遽走人迎先生往診之脈遲而實按之闔腹盡痛至臍下則撓屈拗悶不堪其痛先生曰腹癰也先漬食冷水食之病者鼓舌盡一盃因與大黃牡丹皮湯五六日全愈

「註」此症は盲腸炎にして大黃牡丹皮湯を用ゆべきものなることは仲師の教ゆる處にして先輩の多く經驗する處亦余の實驗する處なり然るに洋方にありては內治法深く信賴すべからざるを以て開腹術を行ふを以て殆んど通規となすと雖も余は繁雜多費危險にして且つ甚だ病者に苦痛なる手術療法を避け優秀簡易なる古醫方を採用するは醫たるものゝ義務なりと信ず。

二、一婦人年可三十有奇疾後竅閉塞不通大便却從前陰泄如是旬許而腰腹陣痛大煩悶燥屎初通前陰所出亦自止嗣後周而又發蓋患之十餘年醫藥百端無不爲矣容貌日羸瘦神氣甚乏師診之其脈數而無力始按其臍下有粘屎即從前陰出再按有一塊應手師問曰月事不行者幾年曰十有餘年矣先與大黃牡丹皮湯緩下之佐以龍門丸瀉之者月一次自是前後陰口得其所居數旬自謂曰妾有牡痔方臨厠也疾痛不可忍師視之肛傍有如指頭者以藥線截而治之仍服前方一周年許塊亦自消

「註」著者未だ經驗なしと雖も此症は經閉の因により瘀血生殖器及腸管に凝滯し初めは血塞たるに過ぎずと雖も年所を徑るに隨ひ增大すると共に組織化して腫瘍となり一面腸管を壓迫して便通を妨げ他面には生殖器の血行を阻碍して一部の壞疽を來し爲に發生したる直腸子宮瘻なるか或は直腸膣瘻なり故に大黃牡丹皮湯を以て其本源たる瘀血塊を除去(此方は治瘀血劑なるのみならず又治創の能あり)するときは續發症の治すべき論を待たずと云はざるべからず而して兼用の龍門丸の何物たるやを知らずと雖も恐らくは治瘀血藥を配合せるものならんそは兎に角前述の理より推究して余の慣用する治瘀血丸代用の不可ならざるを信ずるものなり飜て考ふるに余の未だ此道に入らざりし以前洋醫家の瘻管閉鎖手術を見しこと屢々なりしと雖も失敗に終るの多かりし所以今にして初めて明なり。

○續建珠錄に曰く

一婦人浪華人患鼓脹五年於此近日病勢最危醫以爲不治求治于先生診之腹大滿爲凸臍傍見青筋先生曰此非不可治然如此痼疾非一日二日而可奏効凡疾爲痼者非服藥之久未可有効也病婦曰妾得此疾已五年百方無効今危篤命在旦夕幸而得救死則足唯先生命之從豈有他乎因與大黃牡丹皮湯十餘日小便大便爾後小便快通脹大成尙與前方數旬疾去復常

「註」此病は月經過少或は經閉の因により(余の多數の實驗に因れば此種の疾病は皆月經障碍に因するものなるを以て斯く斷定せり)瘀血腹中に凝滯し漸次に其容積を增大すると共に一部は水化し(瘀血の水化するは古人が血久しければ化して水となると云へるによりて明にして此症に腹水まりたるは與大黃牡丹皮湯十餘日小便大通爾後小便快通脹大減と云へるによりて明瞭なり)腹內血管及腹襞を壓迫し脹鼓(腹襞の膨隆)青筋(腹靜脈の怒脹)を發するに至りたるものにして洋方の慢性腹膜炎に該當する

ものなり故に驅瘀血藥たる桃仁牡丹皮治血利尿劑たる冬瓜子及大黃芒硝の瀉下藥を配せる本方を與ふるときは血水共減盡せらるゝ所以なり古方の微妙なる感嘆に堪へず。

○方技雜誌に曰く

一、駒込白山の傍に一音寺と號する親鸞徒あり其内室大疫にて診を乞ふ夜已に八鼓なり余速に往て診する年三十許疾已に十日を過くと云ふ大熱大渴譫言錯語すれども口舌乾燥卷縮して言語少しも分らず神氣昏冒脉洪數眼中眊眊たり便閉は已に八九日と云ふ余大承氣湯を與ふ穢物を雜へ毎日七八行四五日を經て神氣少しく常に復し尻が痛むと云ふ看護人床瘡(トコブレ)ならんと云ふて側臥させて之を視れば瘡瘍なり余之を視るに鶴口疽にて已に膿を含めり蓋(カノ)長强邊に瘀血留滯して腫瘍を成さんと欲する者邪熱に蒸灼せられて發動釀膿せし也初起より定めて痛み甚しからんに人事不省故其痛を知らざるはまことに災厄中の天幸也邪熱尙盛なる故に猶大承氣湯を與へ疽には左突膏を貼しおき又破潰して疽口陷下五六分徑一寸二三分に及べり是に於て破敵を綿片に攤し瘡口一ぱいに塡めこみ蓋ふに中黃膏を以てす日日三度づゝ張り換て膿を收り大黃牡丹皮湯に伯州散を與ふ三十日餘日にて疫と共に大患洗ふが如く復故せり。

二、溝口鮎右衛門妻經水來らざること三四ヶ月一醫以て姙娠となす五ヶ月に至り坐婆も姙なりとて鎭帶を施せり自已も度度產せし故姙のぐはひも知り姙と思へり然るに十一ヶ月に至りても產の氣ざしなしこゝに於て余に診を乞ふ余熟診するに腹狀姙の樣なれども姙娠に非ず因て經閉なることを告げ聞かせぬ夫婦大に驚き頻に藥を乞ふ乃大黃牡丹皮湯を與ふ日日四服づゝを用ゐ服すること四五日紫血衄血をまじへ下すこと夥し二十日許にして血止み腹狀常の如し翌月月信來り其月より姙娠し翌年夏一子を擧ぐこれは瘀血を殘りなく取り盡したる故なり。

「註」著者の實驗する處によれば不姙症は身體殊に生殖器に瘀血あり生理的機能を營爲する能はざるに因するものなるが故に適方を用ひて此瘀血を除去するときは配偶者に病患なき限りは姙娠し得るものとす而して多血性の人には桂枝茯苓丸桃仁承氣湯大黃牡丹皮湯兼用治瘀血丸を以てし若し陰痿子宮内膜炎等の有するときは八味丸を前方の何れにも合方し内膜炎の場合には更に治帶球を兼用すべし。

○叢桂亭醫事小言に曰く

千葉氏者は酒客なり夏月鰯魚を食て酒を飲む不美と覺此夜欲吐不吐腹肚即痛手足厥冷二便閉結腹面如板手足不可近側臥動搖する時は痛劇欲死柱にもたれて坐す冷汗如流煩渴す或霍亂となし或は食傷と爲す脈細數にて只胃氣有を吉とす腹候痛て不能詳と雖も小腹邊へ手を近けんとすると未近に痛む形あり腸癰なりと思へども未口外するほどに決せず腹鳴するやと問に家人日常に雷鳴する人なり別て高く鳴ると云ふ仍て暫く傍に坐して其樣を診するに水聲を作す仍て甲字加大黃を投ず三日膿を不下腹鳴益甚し腸癰に決す四日に至りて痛劇く小便點滴せず余も亦計極る大黃牡丹皮湯を與ふ夜に至りて

大便下膿如瀉腹滿痛頓に止む又甲字湯を與ふ數日にて愈ゆ一夕田藥を食して痛再復す始よりは薄しと雖も病後末調故に大に疲極すされども不下ば治は望べからず仍て大黄を倍加し再び膿を下す數日を經て平復す。

「註」以て盲腸炎の輕重緩急によりて甲字湯大黄牡丹皮湯を取捨撰擇する所以を知るべし（甲字湯は桂枝茯苓丸茯苓甘草湯合方に薏苡を加へたるの方なり）

○古方便覽大黄牡丹皮湯條下に曰く

一、一男子風毒腫を病愈後二三年瘡口未收水を出す後脚攣急して疼痛忍ぶべからず余此方を用て痛除き瘡口も亦全く治す。

二、一女子十四歳初左腿毒腫を發し潰て後餘毒消せず膿汁淋瀝して瘥ず脚强直して捧の如く厠に登ることあたはず已に六年に及ぶ諸醫療することを得ず余に治を求む即ち此方を作て飲しめ時々虎黨丸にてこれを攻兩月餘にして全く愈たり。

三、一男子熱病を患ひ大半愈て後一日腹大に滿し臍の傍痛て刺が如くなるに此方を與ふること三劑にして愈。

大黄甘遂湯の治驗

○古方便覽に曰く

一僧年二十八淋瀝を患ること數年時に膿血を出し或は米水の如く大便下利し時に秘閉す若下利する時は淋瀝すること稍安く秘閉すれば甚し余診すれば少腹滿して腫狀の如く按せば莖中に引痛と乃此方を作て飲しめ大に下利して痛頓に退き數日にして全愈

排膿散（伯州）の治驗

○續建珠錄に曰く

一、加賀侯臣某謁曰余在國便膿血既五年衆醫不能治也故來浪華求醫療之殆三年然不治矣有友人善醫者投以桂枝加朮附子湯及七寶丸亦無効先生診之腹滿攣急腹底有物按之剛則痛柔則否先生與排膿湯服藥數旬沈痾得瘳

「註」腹底有物の物は直腹筋の一部硬結したるものならん。

二、加州士人某者來在干浪泊患淋疾七年百治無効其友人有學醫者診之與湯藥兼以七寶丸梅肉散久服不治於是請治于先生先生診之小腹攣急陰頭含膿疼痛不能行步乃作排膿湯與之服湯數日舊痾全瘳

「註」小腹攣急は下腹部に於ける直腹筋の攣急なり。

○方技雜誌に曰く

一老父臀痛なりとて診を乞ふ詣り眎るに左側臥して居たり痛み甚しく右側臥も仰臥もならぬと云へり

之を眎るに少しく漫腫して居れども色も變らず肌肉に格別熱もなし能々按撫して見るに眞の流注にて底には已に膿を含めり暫くおさへて居れば熱氣あり早く開割せざれば毒氣追々四邊に廣がることを說きければ病者頻に針刺を乞ふ故に余膿管を見定め鍼針を刺んとするに病者膿のある處はここならんと一寸程脇を指の先にて押す余左樣にてはなし此處也と云へども病者聞き入れず因て病者の申す處を刺すに痛み烈しく黑血のみ出て膿は些も出でず再び余の見こみたる處を深く刺し口を廣くするに稠膿三合許出て痛み失ふが如し瘡口へは紙撚を杉箸の大さにし破敵膏を塗り毎日三度づゝさしかへ排膿散及湯に伯州散一錢づゝ酒服せしめ毒を嚴しく取りたる故速に治したり。

「註」此症洋方なれば大切開を施すべきに漢方にありては僅に排膿の通路を得る丈の穿刺を行ひ餘は全部內服藥のみを以て治すの妙手段あり斯くする時は病者を苦しめず醜形を貼さず經過短く費用少きの利益あり。

甘草小麥大棗湯の治驗

甘草小麥大棗湯の治驗

○生々堂治驗に曰く

車屋街夷川北萬屋喜兵衛之妻姙娠至五個月患水腫及分娩尙甚一醫治之用許多利水之方劑無効既而胷滿短氣煩躁幾死一坐倉遑不知所爲焉時向半夜病者云腹上津津似有水流狀皆異之即披衾視之臍傍腋理自開腫水流漓自是腫減者過半然尙大便溏泄形狀殊危醫以爲表虛裏奪榮陽亦不可及勇退而去因迓先生先生診之脈微而促指甲暗黑面色鮮白四肢腫存半按其腹無痛臍下鼓然如未製皮中包絮者問家人曰小便利否答曰就蓐未曾見快通即作麥門冬木通湯與之小便快利大便時通仍與前方數十貼腹皮竟軟爾後發癲狂呼妄罵晝夜無常將脈則張目擧拳勢不可近因換以甘草小麥大棗湯服百數貼而漸漸得復故

半夏瀉心湯の治驗

半夏瀉心湯の治驗

○續建珠錄に曰く

浪華伏見堀賈人平野屋某男年十八嘗患癲發則欝冒默默微笑慵與人應接故引屏風垂帳避人蒙被而臥方其時大汗出大煩渴飲湯水數十盃小便亦稱之先生診之心下痞鞕腹中雷鳴乃與半夏瀉心湯及紫圓發則別服五苓散大渴頓除小便復常續服半夏瀉心湯久而癲減七八爾後怠慢停藥

甘草瀉心湯の治驗

甘草瀉心湯の治驗

○生々堂治驗に曰く

近江大津人某來見先生屏人竊言曰小人有一女年甫十六既許嫁然而有奇疾其症非所嘗聞者也蓋夜夜乃亡首待家人熟睡竊起舞躍其舞消妙閑雅宛然似才妓最秀者至寅尾罷遂寢以爲常余聞窺之夜夜輒異其曲曲從變奇不可名狀明朝動止食飲無以異常亦不自知其故爲告之則愕然而怪意不信也不知是鬼所憑乎若狐狸所惑耶他若聞之恐害其婚是以爲之陰福呪禱無不爲然猶不効聞先生之門多奇

術幸來視先生應曰此證盡有之即所謂狐惑者行診之果然與之甘草瀉心湯不數日而夜舞自止遂嫁某氏而有子

又聞大津一婦人有奇疾初其婦人不知猫在櫃中誤蓋封之二三日開之猫飢甚瞋目嚇且走婦人大震駭遂以作疾號呼臥起其狀一如猫清水某者師之友也乃効先生方與甘草瀉心湯以治之

「註」以上の二症は憑依病なり。

生姜瀉心湯の治驗

生姜瀉心湯の治驗

○醫事惑門(東洞翁著)に曰く

京師祇園町伊勢屋長兵衛と云ふ者を療治したることあり其病人泄瀉の症にて世醫治し難しと云ふ則余を招く往て之を診するに心下痞鞕水瀉嘔逆してまさに絶せんとす余曰く此病の療治は世上大に恐るゝなり其故は今の醫の甚やわらかりと云ふ藥も此病に用ひて能く的中する時は大に瞑眩する也其瞑眩に恐れては病は治せぬもの也と云ひければ病家の者會釋して藥を乞ふ乃生姜瀉心湯を三貼與へければ其日七つ時分大に吐瀉して病人氣絶す是によりて家内大に騒動し醫を集めて診せしめけるに皆死したりと云て歸る因て急に余を招く又往て之を診すれば色脈呼吸皆絶たり家内の者も死せりとす誠に死したる樣に見ゆれども其形狀に疑ひあり且死してより漸く二時許り也と云ふ先づ靜まりていよいよ死したるか死せざるかを見合すべし藥は前方を口に入れて通らば又飲ますべしと云て歸りぬ其夜九つ時分病人夢のさめたる如く目を開き一類眷屬の集り居るを見て何故ぞと問ふ一族の者も驚きて云ふやふは今日七つ時分より只今まで色脈呼吸ともに絶へたり醫者を集めて見せしめしに死人に藥なしと云て皆歸れり夫故に集り居る也と云ひければ病人も不思議に思ひて云ふ樣は晝のうち大に瀉したり其後一向苦みもなく寢たる樣に覺へたり最早氣力もよくなりたれば皆々歸るべしとされども一族の者訝かしく思ひたれば晝見せたる近所の醫者を招き診察せしめしに脈も常の如く何も病なしと云て歸りける是にて病人いよいよ氣力を得何分歸らるべしと云ひければ一族の者も歸りけり其跡にて甚饑たりとて茶漬三椀を食し悅び寢に就きぬ翌朝益丈夫になりて多年の病を忘れけり此人幼年より食物にあたる故白粥にて養育せられ年四十餘になりても喰ひなれぬ物を喰へば直にあたる故食することあたはず然るに右の病治して後は何を食ふてもあたることなく七十歲までも壯健にくらしけり。

茯苓飲の治驗

茯苓飲(承氣丸、當歸四逆加吳茱萸姜湯)の治驗

○續建珠錄に曰く

一婦人患胃反九年於此經衆醫未嘗些取其効因迎先生診之其腹攣急上下相連雖吐然不渴也食觸口不爽快曰此心胸間有支飲故也則與茯苓飲服數日愈

「註」胃反は吐食病なれば現今の胃擴脹症なり而して其腹攣急上下相連は心下痞鞕にして雖吐然不渴也は吐と渴との存する茯苓澤瀉湯五苓散小半夏加茯苓湯症と類症鑑別を示せるなり食觸口不爽快は本

方證たる虚氣滿不ゝ能ゝ食と同症狀なり

○方技雜誌に曰く

川崎驛會津屋某の婦所謂疝積留飲痛を患ふること三四年發則苦痛甚しく自死を期す諸醫を歴て治せず食漸々に減じ精力衰弱死するばかりになりぬ其頃米利堅の醫生「ヘボン」なる者横濱に來り巧手也とて風評高く患者塡溢す江戸諸國の醫生も入門する者あるに至る會津屋の妻もたとひ治せずとも「ヘボン」の療治を受たしとて轎子に乘り横濱に至り診察を乞ひしに「ヘボン」之を診するに何やら器などつかひ且鼻耳を病人の胸腹に付て候ひければ病者も婢僕も奇異の思ひをなし日本の醫者とは格別の者也とて感服せり診し終りて云ひけるは此病者は不治の病也とて療治をことはりぬ主從仰天し頻りに藥を乞ひけれども不治の病人に無益の藥は與へられぬとて藥を與へず病人者婆扁鵲の如く思ひしに醫人にことわられ大に力を落し泫然として歸り迎も死ぬることならばとて飲食もせず悒欝かぎりなし家人親戚寄合色色慰め漸飲食を進めたりすてても置れぬとて親族集議の上余に治を乞ふ余之を診するに羸瘦して血色なく心下痞鞕晝夜幾度となく脊へかけ痛み時々水飲を吐し食物進まず夜分寢られぬ故に晝は欝々として氣力甚惡く人に對することもいや也と云へり余思ふに其始め食禁もせず藥治も仕遂ずあの妙藥此奇方と醫療も誤藥濫用しかく崇患になりたる也面部四肢肉脱中には微腫を現はせり脈は沈弱なれども必死の症とは思はれず因て茯苓飲加半夏を與へ消塊丸を毎夜八分づゝ用ゆること一月許痞鞕ゆるみ

吐水止み少しく食氣出づこゝに於て當歸四逆加吳茱萸生姜湯に轉じ消塊丸を一錢づゝ用ゆること又一月餘にして諸患去り飲食常の如し「ヘボン」に痛くことわられたる者全快せし故病者も家人も再造を謝しぬ笑ふべきこと也。

木防巳加茯苓湯(承氣丸、茯苓飲、乾姜半夏人參丸、桂枝芍藥知母湯)**の治驗**

○續建珠錄に曰く

一、浪華賈人某者一身面目洪腫小便不利腹脹滿短氣不得ゝ臥其水漏滴ニ干皮外一以ゝ故日夜易衣者數回飲食大減衆醫以爲ニ必死一因迎ニ先生一求ゝ治先生與ゝ之以ニ木防巳加茯苓湯一數日小便快利徐徐瘳

二、攝州荒陵山伶人某氏妻患ニ脚氣水腫一衆醫盡伎百方無ゝ効其病婦周身有ニ水氣一目胞塞小便不通短氣沖ゝ心求ゝ治先生診ゝ之與以ニ木防巳加茯苓湯一八九日未ゝ有ゝ効門人某竊意非ニ平水丸桃花散等一無ゝ奏ゝ効矣乃問ニ干先生一先生曰夫沖心之證凡以ニ氣上攻一所ゝ致也然以ニ峻下之劑一譬猶ニ救ゝ火負ニ薪救溺一授ゝ石也何啻不ゝ利乎其勢益甚不ゝ若ゝ用ニ前方一也爾後病勢漸進命迫ニ干且夕一矣先生依然用ニ前方一不ゝ止旬有餘日而小便快通疾差復ゝ常

「註」元來平水丸桃花散は虚證の水腫に用ゆべきものにあらざれば此症に與ふべからざるは南涯先生の言の如し然れど實證のものに之を用ゆるときは衝心の勢を挫くの妙効あるものなれば前説に深く拘泥すべからず。

三、京師吉田直之進妻患ニ脚氣一衆醫療ゝ之不ゝ治乃迎ニ先生一診ゝ之兩脚及口吻麻痺脚微腫胸中悸大便秘澁心下

石鞕乃與木防己加茯苓湯兼用消石丸(大黄芒硝二味の丸方)不幾日腫消散口吻及脚麻痺治以故將停藥先生曰毒未尽恐後必發矣其人不聽而停藥後果再發短氣息迫凶證漸見乃迎先生謝曰妾方命停藥疾再發先生不棄幸賜診死不忘也乃與前方下咽則吐故與茯苓飲嘔稍罷又與前方兼以參夏丸徐徐瘳

「註」此病者は木防巳加茯苓湯茯苓飲參夏丸(乾姜半夏人參丸)の三證を兼發したるものなり即ち初め木防區加茯苓湯を與へて吐したるにより茯苓飲證の併發せるを悟り之を與へて鎮吐を企てたるに稍應効ありしも全く止むに至らざりしは乾姜半夏人參丸證あるの徴なるを以て之を木防巳加茯苓湯に兼用せしなり。

四、門生某患脚氣其始兩足微腫通身麻痺而口吻最甚自作越婢湯服之爾後兩脚痿弱不能歩行頭痛發熱而汗出心下痞鞕食漸不進胸中悸如奔豚之狀有物升降於其中先生使之服木防巳加茯苓湯煩悸嘔不能下藥汁也門生自以爲難治依請先生診乃與茯苓飲得湯嘔逆煩悸即巳但兩脚痿弱不差更與桂枝芍茯藥知母湯徐徐復常

「註」門生の自ら越婢湯を服せしは誤治の甚だしきものたるは論を俟たずと雖も南涯先生が初め木防巳加茯苓湯證と誤診したるには相當の論據あるものなり即ち木防巳加茯苓湯方中に桂枝石膏あるを以て頭痛發熱汗出の症あることあり又人參あるにより心下痞鞕食漸不進の症を來すことあり又桂枝茯苓ある故に胸中悸如奔豚之狀有物升降於其中の症を發することあり又全方の證として兩脚痿弱不能歩行の症を現はすことあるを以上の診斷を下したるものにして決して盲斷せしにあらざるなり然れども其應効なきに由りて其非を悟り心下痞鞕食漸不進胸中悸如奔豚之狀有物升降於其中の症は茯苓飲證に屬し兩脚痿弱不能歩行頭痛發熱而汗出の症は桂枝芍藥知母湯證なるを斷定せられたるなり。

桃仁湯及桃花加芒硝湯の治驗

五、攝州荒陵山吹嶺(ガクミン)工林氏之妻病後脚生微腫良久一身面目洪腫小便不利短氣微喘不能自轉側求治于先生診之與木防巳加茯苓湯日服七貼經數日而小便快通徐徐瘳

桃花湯及桃花加芒硝湯の治驗

○生々堂治驗に曰く

一、烏丸二條北丹後屋某妻年四十産後其左脇下有一塊閑臥則無所患動展輙疼痛不禁四肢亦然如此者二年然身體肥大先生診之心下滿與桃花湯取瀉日三行或五行月餘乃愈塊亦自消

「註」桃花は瘀血の全く水化するに至らざるものを治するの劑なり故に左脇下の塊(瘀血塊なりと雖も水化狀態にあるもの)身體常肥大及び疼痛(瘀血水化せるものゝ停帶)心下滿(同上の胃内停滯)症を治したるなり。

二、小沙彌年可十五腹腫脹大如瓮飲食輙格於胃脘而不消咳嗽唾白沫得之一周削瘦脉反滑與桃花加芒硝湯三十貼而諸症皆退

「註」之れは水毒の主として呼吸器腹部殊に消化器に停滯したるものなり。

三、 一僧來請曰貧道有奇疾毎歳三月五日必患大瀉者晝夜不知數經三日而止是以身體消削天機盡絶數日復故今慈亦逼其期也聞先生名手故先期乞治先生診之六脈滑數按其心下悸師顧門弟子謂曰所謂時發熱自汗出而不已者先其時發汗則愈又云下利已差至其月時復發者以病不盡也當下之斯人即是與大劑桃花加芒硝湯四貼曰先期五日當服之僧曰諾後數月來謝曰果有驗

「註」脈の滑數なるは體力の衰へざるの候なるにより之れにて下劑に耐へ得るを決定し心下悸は水毒による（茲に明記せずと雖も患大瀉晝夜不知數とあるにより其暴水瀉なりしこと明なれば恐くは胃内停水等の水毒の徴ありしならんと想定す）心悸亢進と認め仲師の下利已差至其年月日時復發者以病不盡故也當下之（大承氣湯條下にあり）によく下すべきものたるを斷じ又師の時發熱自汗出而不已者先其時發汗則愈（桂枝湯條下にあり）により發作前に與へたるなり。

四、 間街揚梅南田邊備後者年三十餘兩脚以下發紫班一醫灸干下廉上廉等穴兩脚麻木紫班仍不退懼而告之乃言是瞑眩也灸火益不止遂不能立迎師治之與桃花湯三貼峻瀉數行翌復省之則已病愈出去

「註」茲には水毒の症を擧げずと雖も其存在を疑ふべからず何となれば桃花は紫班の單存を治するの方にあらずして之れと水毒との併在せるを治するの劑なれば而して洋方に於ては「ウエルホーフ」氏紫班病「ロイマチス」性紫班病等を區別し分類甚だ詳密なるが如しと雖も治方の見るべきものなきは畢竟外觀的分類法にして其本體に通曉せざるの致す處なれば此方及治瘀血煎丸方等に就きて學ぶべきものとす

五、 堺街綾小路北玉屋重次郎年三十病下血旬餘其人常嗜（酒身體殊肥豐師脉之頗有力按其心下悸迺服桃花湯一貼瀉三五行而差

「註」之れは半ば水化せる瘀血ありたるにて其一部は下血となり一部は身體殊肥豐及心下悸となりたるものなり。

六、 伏見樹屋與兵衛患腹痛時時吐酸水者十有一年顏色爲之青黄先生與桃花湯佐以反胃丸毎服三十丸不出一月乃已

「註」反胃丸の如何なるものなるやを知らずと雖も余は此如きの症に生姜瀉心湯或は茯苓飲等を與へ桃花湯を兼用するに効なきことなし。

七、 一男子年五十餘身體洪腫短氣小便不通脈沈而有力與桃花加芒硝湯瀉下如傾其翌腫減過半服之三十又餘貼復故

黄連解毒湯（山梔子）の治驗

黄連解毒湯の治驗

○生々堂治驗に曰く

一、 一男子患黴毒初多服輕粉而無効爾後唯氣上焰頭大重時時昏冒而不能步耳蟬鳴舌彊不能言精神爲之散亂大便或秘或自利先生脈之緊數其腹拘急日此輕粉之所祟乎其輕粉於黴可謂神藥雖然由是誤生命者亦不可勝數此無他在其劑之過不及耳即服黄連解毒湯兼江秋散以去粉毒

大黄硝石湯及茵陳蒿湯の治驗

二、間街五條北大坂屋德兵衛之妻年二十有六月事不常朝食輙吐之暮暮食輙吐之朝醫或以爲翻胃治之曾無寸効其面焰々而脈沈實自心下至小腹拘攣而所按盡痛先生曰有一方可以治矣乃與黄連解毒湯三貼前症頗差後數日卒然腹痛瀉下如決月事尋順也三旬復故

三、某氏每逢烈風其通面頓紫赤冬日最甚皆以爲癩疾先生視之其體豐腹而黑色其人曰余嘗嗜酒過度先生曰此酒毒已梔子散酒服數日痊

「註」梔子散は山梔子單味の散藥なり之より推して黄連解毒湯の主治を知るべし。

大黄硝石湯及茵蔯蒿湯の治驗

○靜儉堂治驗

本莊四目某君臣萩原辨藏黄疸を患ふ數醫を更て累月効を見ず發黄益甚く周身橘子色の如にして光澤なく黯黑を帶び眼中黄金色の如く小便短少にして色黄柏汁の如く呼吸促迫起居安らざるを以て享和發亥七月治を予に求む乃指頭を以て胸肋上を按に黄氣散せず此疸症の尤重症なり仍て茵蔯蒿湯に大黄硝石湯を合し大劑に作て日二三四貼を服さしむ三十日に及て纔に黄色散去し小便清利して全癒ゆ凡疸症の輕重を察するは病者の胸肋の骨間を指にて重く按し指を放てば黄散して其跡白く見へて忽ち復元の如く黄色になる此を輕症とす治し易し重證に至ては重く按ども黄色少しも散せず踞然として動かぬなり此患者の症重症に屬するを以て大黄硝石湯を茵蔯蒿湯に合して與へたるなり食事の下物は蜆ばかり用ゆ妙なり。

○續建珠錄

一男子胸中煩悶反覆顛倒慍慍不能食腹微滿小便不利一身微發黄色與以茵蔯蒿湯兩便快通諸症頓愈

桂枝生姜枳實湯の治驗

○續建珠錄

京師木屋町賈人津國屋某者之僕謁曰吾疾常起于薄暮逮于初更而止矣其初起乎横骨一邊有聲漸升至于心下此時胸痛痛大吐水而後如平日也其他無所苦衆醫交療五旬不差先生診之與桂枝枳實生姜湯三服病頓除

小陷胸湯の治驗

小陷胸湯(四逆散大黄蜜蟲丸)の治驗

○方技雜誌に曰く

○西○兵衛の息年十四五診を乞ふ父母曰伏枕すること已二三年藥餌祈請せざることなし而して病患加重羸瘦削ここに至ると余之を診するに薄暮寒熱を發し胸骨呈露肌膚索澤身面黧黑眼胞微腫腹滿して臍の四旁皮ひつぱり指先がさはりても飛立つ樣に痛み且每食腹痛を發し微利すと云ふ其狀は腹ばかり脹り四肢は柴瘦して恰も乾蝦蟇の如し少しも床より起つこと能はず飲食進まず舌上黄胎小溲黄色脈は

沈にして微數也仰臥すれば臍邊攣痛すと云ふ余其父母に告て曰是所謂疳勞の重症也余の得て治する所に非ざる也父母愀然として曰とても生くべしとは思はず去ながら只一人の子故愛情の餘り一生を萬死に倖す兒が一命擧て先生に托す請ふ愛恤を垂玉へと懇請やまず余辭すること能はず小陷胸湯四逆散合方に蜜蟲丸(大黄蜜蟲丸なり)毎日五分づつを用ゆ穢物を雜へ毎日二三行通利し飲啖少しく進む父母悅喜かぎりなし冬より春まで前劑を仍貫す其間數日鷓胡菜湯を用ひ蛔數條を下せりこれより腹痛截然として止み腹滿攣急共に大に和らぎて自身厠に上ることを得たり二三月にて始て虎子を撤す父母欣喜狂の如し前方を用ること半歲餘擧動略意の如し其父携て渾堂に浴す益快暢を覺ゆ服藥なほ怠らず初秋始て藥を止む此兒の治したるは意外のこと也。

大陷胸丸の治驗

大陷胸丸(小陷胸湯)**の治驗**

○古方便覽に曰く

一男子年十六其三歲の時に胸を撲て胸凸背くゝまりて十三四歲にして寒熱を病み愈て後腰脚痿弱にして起居することあたはず百治効なし如此凡三年と余小胸湯を作て飲しめ三日五日必ず大陷胸丸を以てこれを攻む百有餘劑を用て稍歩行することを得て全愈。

十棗湯の治驗

十棗湯の治驗

○生々堂治驗に曰く

一婦人行年三十餘毎咳嗽輒小便治滴汚下裳者數回醫或爲下部虛或爲畜血萬盤換術百數日先生切按之其腹微滿心下急按之則痛牽兩乳及咽而至咳不禁與之十棗湯毎夜五分五六日差

○續建珠錄に曰く

一婦人卒心胸下鞕滿痛不可忍乾嘔短氣顚轉反側手足微冷且言患項背强按之則堅恰如入板與十棗湯服之纔一貼痛頓止下利五六行諸症悉愈

桔梗白散の治驗

桔梗白散(排膿湯)**の治驗**

○古方便覽桔梗白散の條下に曰く

一、一男子冬月喘急を發し咽へ痰せまり肩息して死せんとするに此方一錢を與へて痰涎二三合を吐して愈たり。

二、一婦人小瘡を病て敷藥(フケグスリ)して後忽然として遍身浮腫を發し小便不利し心胸煩悶して喘鳴迫塞して幾と死せんとす余此方一錢をあたへて水數升を吐す再飲して大に吐下して疾苦立に安し前方を用ること五六日にして全愈。

三、一男子咽喉腫痛言語すること能はず湯水下らず痰咳ありて痛忍べからず余此方一撮(ツマミ)を飲しめ稠痰數升を吐て痛忽に愈て後排膿湯を用て全愈。

四、一小兒三歲驚風を發し愈ざること半日醫藥並に治することを得ず余此方をあたへて咽に下れば痰沫

を吐出し啼聲を發す已後此證にあへば効を得ること擧て數へがたし。

走馬湯(麻黄杏仁甘草石膏湯)の治驗

○靜儉堂治驗に曰く

大坂高麗橋袴屋彌一郎が伴頭藤助なる者交易の爲に文化二年乙丑の十二月東都に來り本石街第四坊の旅館にありて次年丙寅正月晦其從者與惣兵衞なる者年五十一二三日以來心下痞鞕時に拘痛す然ども歸期二月朔なるを以て强て忍て處處に使し此日も亦深川邊へ往て黄昏に回るときは遽に痰涎湧盛呼吸促迫煩躁悶亂咽喉鋸聲の如く身體壯熱手足厥冷頭面胸背絶汗雨の如く横臥すること不能呻吟不止傍人背より抱持す其命風前の燈の如し使を急にして予に治を求む即往て診視するに惡症蜂起すと雖も脈沈細神氣あつて眼精亦脱せず尚尤も手を措べし急に走馬湯を作て法の如く絞て白沫一小盞を與れば痰喘十に七八を減ず尋て大劑の麻黄杏仁甘草石膏湯三貼を與へ一宿にして諸症脱然として失するが如し若夫此症手足厥冷と脈沈細とを取て四逆の輩を用ひ又痰涎湧盛呼吸息迫を見て沈香降氣湯正脈散を用ひ或煩躁自汗を見て承氣輩を用ば其變症忽ち生ぜん如此の證詳にせずんばあるべからず。

附錄

藥品和漢名對照表（イロハ順）

藥部用

漢名	和名	名
茵蔯蒿	かわらよもぎ	葉
鹿角霜	しかのつのゝくろやき	角
半夏	からすびしやく	球根
巴豆	は　づ	種子
白頭翁	をぎなぐさ	根
芒硝	ばうせう	硫酸ナトリユム
麥門冬	やぶらん	球根
貝母	ばい　も	塊
反鼻霜	まむしのくろやき	全部
白桃花	しろもゝのはな	花

白芥子　しろがらし　種子
白牽午子　しろあさがほのたね　種子
人參　にんじん　根
寅蟲　あぶ　全部
牡丹皮　ぼたんのかわ　根皮
牡蠣　ぼれい　殼
土瓜實　かもうりのたね　種子
冬瓜子　かもうりのたねのさね　種子
桃仁　もゝのたねの仁
竹葉　たけのは　淡竹の葉
竹茹　たけのあまはだ　淡竹より採取す
猪苓　ちよれい　地塊
地黃　をさひめ　根
知母　はなすげ　地中莖
黃連　をうれん　根

黃芩　をうごん　地中莖
黃蘗　きわだ　皮
土瓜　かまどのしたのやけつち
黃芪　をうぎ　球根
葛根　くづのね　根
甘草　かんざう　根
甘遂　かんづい　根
乾姜　ほしせうが　地下莖
厚朴　はうのきのかは　皮
粳米　うるごめ　種子
芥葉　もぐさ　葉
大黃　たいわう　根
大棗　なつめ　實
大戟　たかとうだい　根
代赭石　たいしやせき　鑛物

澤瀉（さじをもだか）　地下
當歸（たうき）　根
連翹（いたちぐさ）　實
通草（あけびかづら）　蔓
烏頭（とりかぶと）　種子
鬱金（うこん）　根
括樓根（からすうりのね）　根
滑石（くわつせき）　珪酸マクネシユム
苦參（くらゝ）　根
麻仁（あさのみ）　種子
麻黃（かわらとくさ）　莖
桂枝（けいし）　皮
芫花（むしけし）　花
茯苓（まつほど）　中根
附子（とりかぶと）　種子

粉錫（たうのつち）　鉛白の類
五味子（さねかづら）　實
吳茱萸（からはじかみ）　實
阿膠（にかわ）　皮製の膠
細辛（さいしん）　根
柴胡（あまかな）　根
酸棗仁（さねぶと）　實
山茱萸（さんしゆゝ）　實
山梔子（くちなし）　實
桑白皮（くわのねのかわ）　根皮
皂角刺（さうじゆつ）　根
蒼朮（さゝう）　根
桔梗（きこくのみ）　實
枳實（きこのみ）　實
杏仁（あんづのたね）　種子

橘皮	みかんのかは	果皮	
熊膽	くまのゐ	膽	
雄黄	ゆうわう	硫化砒	
明礬	めうばん	硫酸亞爾密紐謨加留謨	
蜀椒	あさくらさんしよ	實	
樟腦	しやうのう	カンフル	
赤小豆	あづき	種子	
車前子	おほばこのみ	子	
芍藥	しやくやく	根	
赤石脂	しやくせきし	過格魯兒鐵	
鳥胡菜	かいにんさう	海草	
生姜	しやうが	地下莖	
麝蟲	じやちゆ	昆蟲	
蛇床子	やぶじらみ	種子	
薯蕷	やまのいも	根	

鼠防巳霜	もぐらもちのくろやき	全部	
木石膏	あをつゞらふじ	根	
小麥	せきかう	天然含水硫酸カルシユム	
川芎（藁）	こむぎ	種子	
菊蛭	せんきう	根	
水蛭	ひる	全部	

藥物撰擇法

藥物撰擇に關する方技雜誌の所説は最も穩健正確なるを以て左に之を掲載す。

石膏

石膏 唐を用ゆべし和にても其色潔白好く和して推擣するに堅に細く碎くる物を佳とす石見産は多く佳品也唐にても潔白ならず碎きて方解石の如きものあり用ゆべからず石膏を甚恐るゝ人ありしからず煩熱を治し大熱を清解し枯燥を滋潤し上逆を鎮壓する等其効決して他藥の及ぶ所に非ず朱震亨が曰く藥の命名多意あり或は色を以てし或は形を以てし或は氣を以てし或は質を以てし或は味を以てし或は能を以てし或は時を以てす膏字の意深く思ふべし。

滑石

滑石 河内安部郡備前山本山等より出る物生滑石と稱し滑膩なる品を碎き用ゆべし水干と稱する物は僞雜なり用ゆべからず。

甘草

甘草 南京を用ゆべし充實黄色にして枯燥且蟲はまざる物佳なり本邦の産甲州信州及他處よりも多く出づ皆福州種也然れども青くさき氣味ありて惡し今南京と稱する者も實は福州より來ると云ふ。

黄耆

黄耆 綿黄耆と稱する物甘味ありてよし然れども文政の頃より佳品舶來せず今來る品は多くは丸くして牛蒡の様なり中にはひらたくして綿黄耆に似たる物もあり撰み用ゆべし黄耆にも藝州廣嶋加州白山下野日光の産は甘味ありて柔靱肥大の物あり反て唐の粗品に勝れり富士黄耆は苦味ありてあしし。

人參

人參 直根と稱せし品を用ゆべし輕症は竹節にてもよし竹節は水にて洗ひ剉し乾し少しく炒り薄茶褐色にして用ゆべしさすれば青くさき氣去り煎じても泡は立たぬ也大病人又は嘔吐吃逆には必直根を用ゆべし直根も少しく炒がよし直根にも竹節にも玉の付したるあり其玉はかり集め玉人參と呼ぶ佳品也。

桔梗

桔梗 藥舗に生ぼしと稱して肥大充實の品あり之を用ゆべし枯燥輕虚はあしし晒と稱し白色の物は用ゆべからず。

朮

朮 唐蒼朮の洗ひ剉みて白粉を發する物を用ゆべし四十年以來は佐渡より然るども火製にせざる故白色を見はせども實潤にして重し唐の如く火製にすれば費がかゝる故其を厭ひ其儘乾すなり。

黄連

黄連 加州白山下野日光の品住也仙臺の産も細くして長き物は用ゆべし深黄にて苦味の甚しき物佳也肥大にして短かき物は培造なり自生の物に非ず苦味うすし用ゆ可からず。

貝母

貝母 唐にしくはなし去ながら和産も圓實にして白色の品は効あり。

黄芩

黄芩 唐産も朝鮮産も皆よし和も近年は朝鮮種の上品を出だす深黄にして能かれてしめりけなき物を用ゆべし。

細辛

細辛 近年奥州南部佐渡讃岐等より出づ細くして辛味つよく口中習習する品佳也他處より出る大筋にして辛味うすき物は用ゆべからず。

當歸　大黄　麻黄　芍藥　大戟

當歸　今藥舗に鬻ぐものは培植の品にて効ありとも覺へず昔年越後にありし時米山生の物を用ひしことあり是は少しく辛味ありて形長く細根少なく香氣芎藭に類し運血和血の効著し江戸に移りても取寄せたれども手數かかる故今はせん方なく大和培植の品を用ゆ用藥須知に越後の産を擧げ本綱の鐵頭當歸とす今藥舗になし。

芍藥　南部の赤と稱する物山生にして結實拘攣を解くの効著し信州山生の品之につぐ江戸の藥舗餘り下直に仕切る故今は兩方とを持來らず近年は生ぼしと稱する物處々より出づ培植の品なれども肉色淡紅の物を撰び用ゆべし藥舗にて眞の芍藥と云ふ物は蒸し干したる物也用ゆべからず。

麻黄　唐商持ち渡りし上品にて澁くして少しく辛味あるを用ゆべし朝鮮はたけ短かげれども新鮮にて甚佳也今西洋人の横濱に持來る物は青くして莖薄く細長く辛味少しもなし用ゆるに堪へず和と稱するものは犬木賊と云ふ物也即節艸也。

大黄　余が少年の頃は綿紋大黄とて馬蹄の形にて極上の品渡れり追々品劣り近來は佳品來らず西洋人今横濱に來りひさぐ物は皆下品にて効大に劣る疑らくば「大佛加里」「百爾西亞」「獨立韃靼」等の産ならん香川太沖が唐種大黄は長服しても人を虚せず黴毒症には甚佳也と云ひしは妄說の甚しきと云ふべし用ゆべからず。

大戟　必綿大戟を用ゆべし是は誰も知りたることなれども高價をおそれ紫大戟を用ゆる也紫大戟は効大に劣る也。

甘遂　附子　半夏　五味子　括蔞實　葛根

甘遂　肥大白色の品を用ゆべし蟲はみ易き物故硝子壺に貯へ風氣を防くべし和産も堀りたるまゝ干し干上りて後に土を洗ひ落し用ゆれば効ありと云へり薄皮の物故堀て直に洗ふと性來の水が洩れ氣も脫する故効なしと岑先生の話也余いまだ試みず。

附子　東洞先生以來附子を用ひずして烏頭を用ゆ効力尤つよし奥州の産實大の物佳也微火にて煎煑すべし舶來の大附子と稱する物は製法を經たる物也白川附子も製造也用ゆべからず。

半夏　房州より出づる物上品也其形ち丸く高き物甚佳也越後の産も佳也下りと稱する物は形ち少しく平たく之に次ぐ潔白にして大なる物を用ゆべし小粒の物は性力充たずして効劣る。

五味子　天保の初めまでは黑色にて潤ひある物朝鮮より來れり其品甚よかりし今本邦にて五味子と稱する物數品ありて形色同からず酸味ばかり甚しき物は俗にえびかつらと稱する物の實ならん。

括蔞實　東洞先生試驗にて土瓜實を用ゆる也胸痺痰飲咳嗽には其効いちゞるし括蔞仁の及ぶ所に非ず今は藥鉢にても土瓜實を採り鬻く者多し且仲景方には實と稱し仁とは云はず。

葛根　僞品なし板葛根と稱し剉む時ぞくぞくとくづれ粉の出る物佳也色薄黑くして堅き物はあしゝ上品下品とも白色に見せんとて外面に石灰を塗る也能摺落し用ゆべし漢土にては家園にも植ゆ故に後世方に家葛の名あり別物に非ず和産は皆山生野生也。

防巳　唐と稱する物は効著るしからず但德廟の時清朝より苗を取寄せられて酸府藥園へ植附けられしに甚茂せり文化の比までは有りしが今は絶へてなしこれは利水の効反て舶來の品に勝れり大便をも略通せり方今普通の防巳と云ふ物は木通の大なる形也何地より出づるを詳にせず朮茯苓烏頭等の助けを得て僅に効あるに似たり。

乾姜　片製白色にして大なる物をよしとす俗醫藥舖之を生姜と稱するは誤なり一種黑色にして三河乾姜と稱する物あり用ゆべからず。

橘皮　蜀椒の色の如き物佳也腐敗したる物古きもの用ゆべからず又橙皮朱橘皮を挾雜するものありよく撰むべし藥徵に柑橘の辨あれども反て謬りかと思はるやはり柑皮を用ゆべし柑即橘也柑は後世の字故に古書には柑の名なし後世陳皮と稱するは陳橘皮の略稱なるべけれども但陳皮と呼んでは何の陳皮か別らず香川太沖が雪蹈の古皮かと嘲りしも宜なり本草の六新八陳の說は妄說也藥は皆新物を佳とす

桂枝　唐の品香氣つよくして辛味つよく少しく甘味を帶る物佳なる神農本草に牡桂菌桂と分け効能も別別なれども拘るべからず是仲景氏の云はざる所也厚薄ともに澁味なき物はよけれども先は薄皮の物佳也今は上品少し土佐の產も紀伊の產も辛烈にして甘味を帶び澁味なきは用ゆべし桂枝はもと刈葉の如く年年枝を刈り皮をむきたるならんもし然らざれば桂枝と呼ぶも其義通ぜざるに似たり香川太沖が桂皮と改めしも其理あるに似たり根皮と呼ぶ物は用ゆべからず。

厚朴　文政ごろまでは厚き品舶來せり其後は薄き物ばかりにて効なし世に薩摩或たぼ皮或銀山の產と呼ぶ物あり厚皮にて其色栗の皮より濃く剉みて藥刀のあと少しく光り白點を見る物効あり撰び用ゆべし東洞先生の說に京都比叡山に冬凋まざる物ありと云へり五十年前先師御普請役人に賴み內內少ばかり取寄せしことあり至て上品也然し禁制にて採ることも他に移し植ることも出來ぬと云へり惜むべきこと也。

枳實　唐の品香氣ありてよし心胸を開き腹中の鬱閉を通ずること妙也餘り大ならず肉の茶褐色なる物佳也肉白き物は宜しからず和產茶の實樣丸藥樣と云ふ物は橘柚橙柑臭橘等の花落ちと云ふ物を拾ひ集め乾したる物也苦味甚しく臭氣つよく芳香の氣なし用ゆべからず中割と稱する物は缺を補ふに足れり是疑らくば漢種ならん。

酸棗仁　實したる物を撰み用ゆべし。

茯苓　肉理細かにして潤實淡紅色の物効あり白くして子ばり氣なくぞくつく物は効なし用ゆべからず

猪苓　唐品沈實の物効あり和產も輕虛ならざる品は乏を助るに足る。

龍骨　備州小豆島に出づ少しく赤色を帶び舌に粘着する物を用ゆべし唐產は白色或薄茶色也其他効大に劣る延喜式には安房の國より年々三斤づゝ獻せし事見ゆいかやうの品なりしにや今は聞かず。

牡蠣　碎き牡蠣と呼ぶ物を用ゆべし今の吉益牡蠣は牡蠣殼ばかり燒きたる物とも思はれず因て余は碎

き牡蠣を用ゆ。

地黄　大和より出づる乾地黄肥大の物を用ゆべし醫人乾地黄を生地黄と稱し生地黄を鮮地黄と呼ぶ者あり誤れりと云ふべし。

澤瀉　仙臺丹後より出づる肉白肥大の物利水の効尤勝れり。

瓜蔕　（瓜蔕）越前の産を佳品と稱す今藥舗の賣る物何れより出づるを詳にすること能はず苦味甚しき物を撰むべし。

知母　唐産は上也和産も唐種と稱する物は佳也。

括蔞根　土瓜根を僞るものあり土瓜は其色潔白ならず。

通草　木通と稱す和産を撰み用ゆべし唐は反てあし。

芎藭　豐後の産自生にてよし然れども甚少し。

牡丹皮　下りと稱する物は園中の品也地と呼ぶ物は山生也信州山生の産をよしとす。

乾漆　黑色光亮の品佳也贋僞多し松岡玄達の説に眞僞を試むには火に燒き硫黄の氣をなす物は石炭也と云へり。

黄土　伏龍肝とも稱す竈中黄土是也自身とり用ゆべし俗黄つちと云ふ物と混ずべからず。

赤石脂　古渡りと稱し白色淡紅色相交る物上也和産も佐渡出羽山城等には上品ありといふ。

代赭石　舶來のいほでと稱する物佳也和も尾州濃州より佳品産すと云へり。

芫花　和漢ともあれども漢名を用ゆべし和名しげんし又さつまふぢ本綱草部に入るゝは誤也木にて三月淡紫花をひらく幹の高さ二三丈に至る又黄花の物あり。

竹茹　竹葉ともに淡竹を用ゆべし藥舗にて苦竹孟宗竹の皮を賣る者あり撰むべし。

蜜蟲　舶來新物を撰むべし本艸家さそり或源五郎蟲を蜜蟲にあつるは誤也。

粉　粉錫なり又白粉胡粉とも稱す藥舗にて唐の土と呼ぶ物是也。

阿膠　舶來の硯手と稱する物上品なれども今は稀なり櫛手のすかして透明なる物を用ゆべし和産玉阿膠は効劣れども臭氣なき物は缺を補ふべし。

吳茱萸　漢産小粒の物を用ゆべし和も官園産にて臭氣なくかれたる品は佳なり。

辰砂　丹砂の辰州より出る者也漢土にては丹とも稱し又單に朱とも稱し又朱砂とも稱す本邦にて朱と呼ぶ物は水銀にて製したる物也混ずべからず。

麥門冬　藝州の産佳なり大粒のもの滋潤の効勝れり。

皂莢　猪牙と稱し長さ二三寸の品佳也肥皂莢は長さ一二尺もあり用ゆべからず。

白桃花　花の開きかゝりを乾し用ゆべし新しき品佳也輕浮の物故古さは効なし。

寅蟲　和漢とも形小にして新しき物を佳とす。

紫蘇　芥葉　側栢葉　猪膽　熊膽　天瓜粉　防風　鶴胡菜

紫蘇　ちりそん紫蘇と稱する物佳也身採り乾し用ゆべし。

芥葉　五六月に採り乾し用ゆべし。

側栢葉　世に兒手柏と呼ぶ物也年年葉を採り乾し用ゆべし。

猪膽　野猪の膽也甲州の産上品也贋品多し精撰すべし効用熊膽に讓らず。

熊膽　琥珀様と稱し琥珀の色の如き物極上也茶褐色の物之に次ぐ皆秋取る品也黒手の上品之に次ぐ會津和州の産上品也然れども贋も亦多し精撰すべし他州の産も佳品は用ゆべし甲州にて春取りし品は正眞にても苦味薄く四五月頃は柔になり六七月に至れば泮る物あり下品也熊膽は眞物をよく味ひ眞贋を自得すべし眞物の氣味を心得すれば僞物に眩することなし。

天瓜粉　潔白にして袋の上より握り其音雪を握りしめるが如き音のする物よし葛粉生麩の粉を交へ僞る物あり撰むべし。

防風　筆防風藤肋防風と呼び直根にして長さ五六寸より七八寸の物を用ゆべし。

鶴胡菜　此物歴代本艸に載せず閩書南山志漳州府志に始て出でたり蛔を下すこと妙也又蛔なくとも腹痛久しくやまざるをも治すよく腸垢を取ること妙也其効「せめんしとな」の蛔を下すばかりと同じからず吾邦にてはまくりと稱し古くより用ひ來れり腹中の垢穢をまくり出だすの効ある故名付けたるなるべし。

梔子　青礞石　家猪膽　薤白　雲母

梔子　山生の小にしてこげ色の品効あり鮮黄にして形大なるは効劣る用ゆべからず是は染屋のつかふ物也仲景方には山梔子とはなけれども山生の品佳なり。

青礞石　古渡りの品上也これを燒には青礞石消石等分を別に末にし鐵鍋の中に消石の末を敷き其上に青礞石の末を入れ烈火にて燒けば消石熔る也其時よくかきまぜ火斗のやうの物に傾斜して火氣を去れば かたまる也それを金鎚にて碎き藥研にて細末となし用ゆべし。

家猪膽　ぶたの膽也余自身採り乾し用ひしことあり熊膽の下品よりもよし形は大なれども汁少なき物故乾すと皮ばかりの様になる也。

薤白　五月根の實したる時採り二つ割りにしてよく干して置き用に臨み小口より切り用ゆべし黴の出ぬ様に氣を付時時干すべし痰飲胸痺肩背の痛み等には洵に聖藥也類聚方中の薤白諸方を用ひて其効を知るべし。

雲母　唐産蘭産を佳とす和産も參州の上品は缺を補ふに足れり。

臨床

應用漢方醫學解說（終）

大正六年十一月十二日印刷
大正六年十一月十八日發行
昭和八年四月十五日增補第六版印刷
昭和八年四月二十日增補第六版發行

增臨補床應用漢方醫學解說奥付

正價金參圓五拾錢

著者　湯本求眞

發行者　大阪市東區道修町一丁目　赤木時雄

印刷所　大阪市西區阿波座三番町　同濟號印刷所

發兌元　大阪市東區道修町一丁目　同濟號書房

振替口座大阪三九番

不許複製

東京市本郷區春木町三丁目　南江堂書店
東京市本郷區春木町二丁目　半田屋書店
東京市本郷區龍岡町三二　南山堂書店
東京市本郷區龍岡町三六　下田文榮堂
東京市本郷區龍岡町　吐鳳堂書店
東京市本郷區湯島切通坂町　金原書店
東京市本郷區湯島切通坂町　宮澤書店
東京市本郷區湯島切通坂町　富倉書店
東京市本郷區元富士町　文光堂書店
京都市寺町通御池南入　南江堂書店
東京市日本橋區通三丁目　丸善株式會社
東京市神田區表神保町　丸善株式會社神田支店
東京市芝區三田町二丁目　丸善株式會社三日出張所
東京市丸ノ内ビルディング一階北通　丸善株式會社丸ノ内賣店
大阪市東區博勞町四丁目　丸善株式會社大阪支店
神戸市明石町三十一番地　丸善株式會社神戸出張所
京都市三條通麩屋町西へ入ル　丸善株式會社京都支店
名古屋市中區榮町六丁目　丸善株式會社名古屋支店
横濱市辨天通二丁目　丸善株式會社横濱支店
福岡市博多上西町　丸善株式會社福岡支店
仙臺市國分町　丸善株式會社仙臺支店
札幌一北八條通西四丁目　丸善株式會社札幌出張所

元文部大臣 故小松原英太郎閣下題辭
工學博士 細木松之介氏校閲 工學・藥學大家數氏編
藥學博士 故島田耕一氏

工業藥品大辭典

正價 金八圓
送料 內地金貳拾二錢

同濟號編輯部編
和漢歐

賣藥製劑篇

正價 金四圓五十錢
送料 內地金廿二錢

藥學博士 故島田耕一氏著

醫藥學獨和辭書

正價 金貳圓
送料 金拾錢

元福岡醫科大學助手 須子太一氏著
三醫科大學各府縣病院

處方及製劑類集

正價 金貳圓
送料 金拾錢

醫・理學博士 桂田富士郎氏序
醫學得業士 湯本求眞氏著
增補臨床應用

漢方醫藥學解說

正價 金參圓五拾錢
送料 內地金拾四錢

工學士 吉村兼富氏編
實驗應用

化學工藝品製造法

正編 正價 金貳圓五拾錢
續編 正價 金貳圓五拾錢
合編 正價 金拾五圓
送料 金四錢

英國牛津有機化學研究所長
藥學士醫學士 橋爪惠氏譯 パアシイ・メイ氏原著

醫藥合成化學

特價 金參圓五拾錢
送料 金拾四錢

同濟號編輯部編
現行

賣藥法規註釋

正價 金壹圓五拾錢
送料 金拾錢

內務技師 藥學士 野副豐三郎氏參訂
前富山藥專教授 藥劑師 日野五七郎氏
藥劑師 一色直太郎氏 合著

最新和漢藥物學（植物編）

正價 金四圓五拾錢
送料 內地金拾四錢

續最新和漢藥物學（鑛物、動物、黑燒、人類門編）

正價 金四圓五拾錢
送料 內地金拾四錢

最新和漢藥物學正續合篇

正價 金八圓五拾錢
送料 內地貳拾二錢

藥學士 窪美溫氏著

植物化學分析法

（一名植物成分檢出法）

正價 金參圓
送料 內地金拾錢

元大阪工業學校教授 故齋藤正次氏著
新撰

化粧品製造法

上製 正價 金參圓
並製 正價 金貳圓
送料 金拾四錢

平松靜一、日下部霞村兩氏合著（第五改正日本藥局方準據）

藥種商試驗問題答案集

正價 金貳圓
送料 金拾錢

藥學博士 故島田耕一氏著

らてん語處方文例

附 簡約羅甸文法通解

正價 金壹圓八拾錢
送料 金拾錢

頭山滿翁題字
醫學博士 井上善次郎先生序文
醫學博士 森田幸門・毛利部紫山先生合編

診療漢法醫筌

正價 金八圓五拾錢
送料 內地金廿二錢

60
389

終